

防衛大学校同窓会機関誌

小原台だより



時計台

- 榎記念室の開設
- 防衛大学校の現状について
 - 学科教育の改革と現状
 - 防大教育について思う
- 特集記事：今人生、男盛り

同窓会ホームページアドレス：<http://www.bodaidsk.com/>

メールアドレス：honbu@bodaidsk.com

新年のご挨拶



防衛大学校同窓会会長 竹河内 捷次

全国各地そして海外各地でご活躍中の同窓会会員の皆さん、健やかに新年をお迎えになられたこととお慶び申し上げます。

さて、去年は、長年の懸案であった防衛庁の省へ移行が実現し、国際平和協力活動等を自衛隊の本来任務とする法律も成立しました。一昨年の統合運用体制の発足、内部部局の大規模な改編、平成15年の武力攻撃事態対処関連3法（有事法制）成立、平成16年の事態対処法制関連7法成立および3条約の承認などを併せ考えますと、防衛省・自衛隊の任務実施の体制は一段と充実して参りました。これからは、防衛省・自衛隊がこの体制の中で、いかに国の要請、国民の期待に応えていくかが問われるとともに、自衛隊に対する期待と関心もいよいよ高まっていくものと思います。

さて、世界を見ますと、テロとの戦いは継続し、イラクの民主体制はいまだ整っておらず国内情勢が安定するには程遠い状況です。わが国周辺を見ましても、北朝鮮の核開発、ミサイル、拉致問題など未解決のままで、まだまだ安心できる状況ではありません。中国との大陸棚海底資源問題、歴史問題、中台問題なども目を離せない状況が続いています。

国内の政治状況はと言いますと、先の参議院選挙で野党が過半数を制することになり、衆議院で過半数を有する与党との間でいわゆるねじれが生じています。去年の海上自衛隊のインド洋における燃料給油継続の問題につきましては、議論が本質的問題の周辺に集中し、本質的な部分の議論が十分なされなかったと思います。防衛省の不祥事、給油活動記録等の問題があったとは言え、核心部分の議論ができないまま国の意思決定もできず燃料給油は停止してしまいました。わが国ができる国際貢献として非常に有効であった艦艇給油が停止されたことは、わが国の国際貢献への姿勢について、国際社会に対しネガティブなシグナルを送ることになったのではと危惧しています。

我が国が取り組むべき安全保障の問題は上記の他にも中国、北朝鮮に関わる諸問題、日米安保体制の信頼性強化、アジアの安定、国連改革、エネルギー問題、食糧問題など多数あります。与野党逆転の現

状は、見方によってはこれまで避けられることが多かった外交防衛など国政の基本となる事項について、本質的な議論が交わされる好機とも言えます。今後、国際貢献を含め国の重要な課題が、現場の状況や防衛の実態を十分に踏まえ、各種情報がオープンにして与野党間で本質的かつ真剣な議論が行なわれ、国政に関する国民の理解が一層深まることを期待したいと思います。防衛の現場を知る同窓会会員の見識がこのような議論の機会に活かされることを願ってやみません。

私は、昨年4月佐伯会長のあとを受けて会長に就き約8ヶ月になります。この間、会員相互の親睦、母校の発展への寄与、社会への貢献を目的として、各種事業を積極的に実施して参りました。本年も以下の項目を重視して同窓会の発展のため努力していきたいと思います。

その1は、同窓会組織の充実です。防大同窓会は、各期生会を組織の基幹とし、期生会との緩やかな「縦」の連合体を目指しています。また地域支部等との緩やかな「横」の連合体も目指しています。去年は新たに直轄支部の桜華会、山口支部、四国地域支部が発足し、現在6地域支部と9直轄支部となっています。今後、更に多くの支部の誕生を望んでおり、地域支部等の立ち上げ及び活動を支援していきたいと考えます。

その2は、同窓会会員の交流と親睦です。ゴルフ、テニス、囲碁などの期生会対抗競技は平成9年以降継続実施しており、昨年もそれぞれ200名近い同窓会会員の参加のもと競技会を実施しました。それぞれの競技を通じ、年齢や陸・海・空の相違を超えた親睦が図られたものと思います。平成12年から始まったホームカミングデイ（卒業式当日に防大校長から招待を受け母校訪問）は、1期生から順次進み今年は9期生が参加することになります。例年家族を含め350名程度の参加を得ています。一昨年からスタートしたホームビジットデイ（卒業後20年で開校祭当日に防大を訪問）は、今年3回目で32期生が参加します。去年は31期生が実施し、家族を含め約210名が参加しました。

その3は母校の充実、発展への寄与です。母校に

対しては「目に見える支援」に留意し、防大当局との意思疎通や学生ニーズを把握した上で、防大行事への積極参加、校友会活動等への支援を行っています。

現在、母校はその充実発展のための様々な取り組みを行なっています。楨記念室の開設と防大歴史資料の整備、研究任務の法制化、大学博士課程（文系）の開設、多文化世界におけるPKO活動のための地域研究の推進、防衛学の充実と強化のため人材を確保、学生の外国との相互交換留学、国際士官候補生会議の開催・拡充、防大の入学者数を増やして定数に近づけることなどです。同窓会としては母校の充実発展に資するこれらの取り組みを応援していきたいと考えています。

その4は、財務基盤の維持です。健全かつ安定した財務基盤を維持することは、現在及び将来における同窓会活動を遂行する上で不可欠な要素です。同窓会は会費納入を促進して安定的な財源確保に努めるとともに、引き続き事業の計画及び実施段階における経費節減努力によって財務基盤の健全性と安定

性を確保していきたいと考えます。

その5は、MCI（Military Cyber Institute）事業の推進です。本事業の目的は「防大同窓生の軍事に関する識見を集結して国家・社会に対して軍事的考慮の重要性を広く発信する」ことです。現在は、同窓会ホームページの中に「MCIホームページ」を開設し、同窓生の著作紹介を実施して軍事情報の配信を開始しています。今後は、同窓生の論文や講演録の掲載を図るとともに、同窓生の防衛に関する知識や経験を社会に発信できる施策の検討・実現を目指しています。

以上、同窓会の状況など紹介させていただきましたが、防大同窓会の充実発展は会員の皆様の強い関心と、諸活動への関与、参画が大変重要だと考えています。会員皆様の一層のご理解、ご支援、ご協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、同窓会会員および家族の皆様のみますのご健勝とご多幸をお祈りして新年のご挨拶といたします。

目 次

■会長の年頭ご挨拶	2
■楨記念室の開設	4
■防衛大学校の現状について 学科教育の改革と現状	5
防大教育について思う	6
■新編・改編の部隊で活躍する同窓生 世界最強を目指す「中央即応集団」	8
地方協力本部の今	9
■UNDOFに参加して	11
■防大51期生に聞く 後輩に伝えたいこと	13
後輩へ送る言葉 ―「座右の銘」の重要性―	13
将来を見据え、今最善を尽くせ！	14
■雑誌「小原台」について	15
■特集記事：「 今人生、男盛り 」 1期生：卒業50周年を迎えて	16
2期生：今の人生を愉しむ	17
4期生：描いた!! 1200枚!!	18
5期生：人生は、二度甘い	20
■就職援護最前線で活躍する同窓生	22
■同窓会事務局員を下番して	24
■防衛大学校同窓会創設50周年記念事業	25

■小原台は今 富永 洋氏防衛大学校副校長就任	27
楨記念室の設立について	27
第11回防衛大学校オープンキャンパス	28
平成19年度運動系校友会活動結果及び部員状況	29
■同窓会事業等 顕彰碑献花式	30
防大卒業留学生歓迎夕食会	30
ゴルフ・テニス・囲碁	31
ホーム・カミング・デー（HCD）	32
ホーム・ビジット・デー（HVD）	33
防大夏季部隊実習支援	34
MCI事業の現状について	34
■同窓生アラカルト 宇宙との関わり	35
新たな戦場「永田町」に立って	36
■期生会だより	37
2期、8期、21期、22期、28期、30期	
■支部だより	41
九州、四国、山口、広島、北陸、 小原台クラブ、桜華会	
■会計報告	47
■同窓会本部・支部等役員紹介	49
■期生会会長・代議員紹介	50
■名簿管理に関するお知らせ及びお願い	51

楨記念室の開設

防衛大学校長 五百旗頭 真



防衛大学校の幸せは立ち帰るべき精神の拠点があることではないか。

楨智雄初代校長は、旧軍の伝統を切断された敗戦時に、依拠すべき伝統がないが故に、切に精神の拠点を求め、自らそれを編み出していった。校長は米欧の士官学校を訪ね、米国のリベラル・エデュケーションを重視する学風に共鳴した。

ウエストポイントやアナポリスの米国土官学校は、創設期に比し20世紀の総力戦を経た後は、むしろ軍事訓練を急ぐよりも生涯にわたり軍のリーダーたるための人間としての器、知的・肉体的・精神的基盤を築くことに比重を移していた。民主主義社会にあって軍人エリートは社会のエリートと共感を築くことができなければならない。一般大学と同じカリキュラムをこなす方向に動いていた大戦後の米士官学校のあり方を、楨校長は肯定した。

イギリスに学んだ楨校長は、ノーブレス・オブリージ（高き者の責務）を語り、特殊な軍人である前によき人間たれと教えた。英国的な人格教育の理念と素養がベースにあって、楨校長は米士官学校の真髄を引き出し、防大の教育理念に活かしたと理解されてきた。

この点が、本年11月22日と23日に防衛大学校で開催された日本防衛学会の第一回研究大会において深められた。「吉田茂と防衛大学校創設」の部会における轟孝夫報告は、楨先生が英国オクスフォード大学留学中に師事したアーネスト・バーカー教授の政治思想を紹介し、楨理念の重要な基盤をなしていることを解明したものである。楨校長が具体的にどのような思想内容を英国政治思想から継承したか、これまで必ずしも明らかでなかっただけに、画期的な研究報告であった。

この学会のセッションは田中宏巳教授を中心とする楨校長についての調査と研究の中から生まれたものである。田中研究会は次のような事情から生まれた。

昨年8月に防大校長に着任した私は、当然ながら防大教育のエッセンスが何であるかにつき学び考えようとした。楨初代校長と防大創設の歴史に、私は心を奪われた。防大の誕生は戦後日本史の奇跡であり、防大の存在は戦後日本史の宝であると思うようになった。

たまたま昨年3月の卒業式に、8期生がホームカミング・デーで来訪することになった。8期生と9期生は、楨校長のもとで学生綱領を作り上げた世代である。学生たちが自らの手で学生綱領を作り上げた歴史に、私は興味を覚えた。戦前の伝統を絶ち切られた防大が、「自らの手で伝統をつくり上げる」歴史に立ち向かった偉大な瞬間であると思った。

戦後50年間、反軍的風潮に耐え、黙々と勉学と訓練を重ねた自衛隊は、冷戦終結後、「多機能・弾力的・実効的」たることを求められ、忙しく国内と国外に東奔西走する事態を迎えた。防大生はやがて幹部自衛官として部隊を率いて、国防事態に、災害救援に、PKO活動にと赴かねばならない。活躍の場があるのは結構であるが「忙」は心を失うと書く。そういう時こそ、精神の拠点がしっかりとしていなければならない。精神の拠点を立派に据えた楨初代校長の記念室をつくるべきではないか。防大生が自らの生き方を、そこに坐って、楨先生を想起し、先生と対話できるような記念室である。

防大11期生である馬場副校長に相談したところ、積極的に賛同された。後は馬場先生の知恵と行動である。田中先生に楨記念室のプランづくりと展示を依頼された。承諾した田中先生は、徹底した対応を示された。楨記念室のための資料集めだけではなく、研究会を組織した。その水準の高い本格的な調査研究には敬服するほかはない。その中から生まれたのが、楨先生の思想的源泉をつきとめる轟ペーパーなのである。

今後の幹部自衛官にとって、精神の拠点とともに高度化する現代世界と安全保障への認識が重要であると思う。私の夢は、防大が日本における安全保障研究のCOE（Center Of Excellence）となることである。そのため、総合安全保障研究科を博士課程まで拡充することを国にお願いしている。術科に留まらず、安全保障政策と国家戦略を考察する研究と人材を生み出す大学院を持ちたい。

同時に日本社会にも安全保障をめぐる学術と実務を結び合わせる学会があってよい。防大ほどそうした活動を担える機関はないであろう。防衛学群の教官と国際関係などの教授をはじめ、実務専門家となる者が一緒になって、実際に踏まえた学術的研究、学術的視野をもったの防衛実務を達成したい。戦前の日本においては両者が乖離し、政治社会と軍事も遊離していた。その歴史を超える起爆力を今日の日本は持ちたいものである。そうした想いをこめて発足した日本防衛学会の第1回研究大会が、楨校長と防大精神の淵源を明らかにし、活発にして充実した報告と討論を繰り返し上げたことを心強く思っている。

(平成19年11月 記)



学科教育の改革と現状

防衛大学校副校長 馬場 順昭 (11期・空)



周知のように、防大教育は旧陸海軍の過誤に対する反省から次の3点を理念として出発しました。「陸海空要員を統合教育すること」、「豊かな教養を持った社会人であると同時に新しい民主主義時代に相応しい高い識見を持った幹部を育成すること」、「学科教育は大学教育と防衛学の二本立てとし、大学教育では理工学教育を重視すること」。

軍学校としてのこれらの教育理念は昭和28年当時としては世界的にほとんど例がなく、この方針に反対する意見や将来を危ぶむ声も多く聞かれたようです。しかし、初代横智雄学校長はこの教育理念の大本を決定した吉田茂首相の意をよく汲んで、卒業後部隊で直ぐに役に立つ軍人教育よりも将来の伸展性を重視した人間教育、いわゆる、ジェントルマン教育に徹した具体的な教育方法を導入し、将来に亘る防大教育の基礎を築きました。このようにして築かれた防大教育は大学教育、防衛学、訓練、学生舎生活、各種運動競技会、校友会活動等から成る全人教育であり、ほとんどの一般大学が学科を中心とした大学教育であるのとは大きな違いです。

凡そ物事には、時代と共に社会の変化・進歩に合わせて変えていかなければならない部分と時代が変わっても変えてはならない部分がありますが、防大教育についても同様です。創立時の建学の精神は変えてはならない部分ですが、学科等の組織、教科や訓練のカリキュラム、施設等は学問の進歩や社会の要請・変化に応じて変えていかなければなりません。

学科教育は理工系6分野（電気、機械、応用物理、土木、応用化学、航空）を専門として開設しましたが、昭和49年には社会科学2分野（管理学、国際関係論）が開設され、更に、平成12年には人文学科1分野が開設されました。このことにより防大には教養教育の基礎を成す3分野（自然科学、社会科学、人文科学）の専門学科ができました。現在では、理工系11学科（応用物理学、応用化学、地球海洋学、電気電子工学、通信工学、情報工学、機能材料工学、機械工学、機械システム工学、航空宇宙工学、建設環境工学）、社会科学系2学科（公共政策学、国際関係学）、人文学系1学科（人間文化学）の14学科の専門があり、学生定員は理工系375名、人社系85名です。

自衛隊の日米共同訓練や各種の海外活動・勤務の増加に必ず、学生の語学能力を向上させるために語学教育の改革も行ってきました。現在では英語は4年間を通しての必修科目であり、多数のネイティブ・スピーカーを非常勤講師として採用しています。第2外国語としては従来から独語、仏語、露語、中国語がありますが、平

成7年には朝鮮語を、平成14年にはアラビア語を開講しました。

国際交流は年々拡大しており、これらは学生に国際感覚を醸成する良い機会を与えています。その一つが海外派遣です。短期派遣としては、米国、英国、仏国、独国、韓国、タイ、シンガポール、豪州の各士官学校へ1～3名の学生を2～3週間派遣しており、年間の派遣総数は約40名です。長期派遣としては、平成14年から韓国空軍士官学校へ1名の学生を1年間派遣しています。また、平成18年度からはアナポリス海軍士官学校との交換留学制度を開始し、平成19年度からはコロラド空軍士官学校との交換留学制度も開始しました。この制度では各士官学校と2名の学生を約4ヶ月間交換しています。

国際士官候補生会議の主催も国際交流の一つであり、平成9年度から実施しています。昨年度は13カ国から15名の士官候補生を招聘し、「多極化時代における安全保障」という統一テーマで学生による討論を行いました。

また、外国人客員教授の招聘も行っています。この制度は昭和49年に開始し、毎年数名の著名な学者を1～2週間招き、15時間の特別講義を実施しています。米国のライス国務長官もスタンフォード大学政治学部の助教授時代に来校し約2週間滞在し、「軍事組織について」という題目で講義したことがあります。

留学生は、現在、アジアの9カ国（タイ、シンガポール、インドネシア、モンゴル、ベトナム、韓国、ルーマニア、カンボジア、インド）から受け入れており、本科と研究科を合わせて90名の学生が防大生と一緒に学んでいます。

防衛学教育は、開校時は陸上・海上・航空の各防衛学教室のもとで「要員別防衛学」を中心に30単位の教育を行っていましたが、その後、数回の改革を経て、現在では戦史、国防、軍事・科学、統率等に関する基礎理論から成る「共通防衛学」を中心に24単位以上の教育を行っています。このような教育内容の変化にともない、要因別であった教室は教育研究分野別に3教室（戦略教育室、統率・戦史教育室、国防論教育室）に改編され、教官団は陸海空自衛官およびシビルによる統合編成となりました。また、平成17年には安全保障と危機管理に関する教育を行うためのセンターも新設されました。

以上のように、本科学生教育のカリキュラムは盛り沢山であり、限られた時間の中で、勉学・語学・運動・訓練・学生舎生活・各種行事・校友会活動等のすべてを完全に修得することは困難であるかもしれませんが、全学生が自主自律の精神に則り、すべてに対して日々挑戦してくれることを願っています。

防大教育について思う

防衛大学校 幹事 火箱 芳文 (18期・陸)



1 はじめに

横初代防大校長は1期生の入校式の訓示で次の様に述べている。「我々の心よりの願いは諸君の修養や学業の結果が1つの信念となって諸君の生涯を通じて役立ち、諸君の学校の選択が誤りでなかったことを証し得て、そのことに大きな誇りを感じていただきたい・・・」防大卒業以来33年間国防の任に就いてきたが、私自身防大を選択したことに大きな誇りと感謝を感じ生涯の宝としてこれを持ち続けることだろう。幹事として21世紀のわが国を背負う若人達の教育の一翼を担うことになり、彼等が大きな誇りを実感できる大学にしなければと思う。それには幾多の諸先輩が築いてきた歴史と伝統を受け継ぎ更に新しい伝統を創造していくことが肝要と思うがその改革の歴史をふり返り現状について考えてみたい。

2 防衛大学校の設立の歴史

防衛大学校の前身は保安大学校である。保安大学校発足に到るまでには昭和25年8月10日警察予備隊創設以来綿密な検討が加えられ、周到な準備がなされた。当時の首相、吉田茂がアメリカによる性急な再軍備要求に抵抗する一方、将来の本格的な「再軍備」のための長期的な目標として幹部養成学校即ち保安大学校の設立を推進した。昭和26年6月増原警察予備隊本部長官に警察予備隊の中堅幹部養成機関について研究を指示し、昭和27年2月「警察予備隊幹部養成学校（仮称）設立要綱」と「保安隊・警備隊要員合同学校の方針」が作成された。この要綱等をもとに保安大学校の設立準備が具体的に進み、昭和28年4月の開校を迎えている。この要綱は学校設立の趣旨、学校の性格、教育の方針、学校の所管、組織・定員、学生の身分と給与等からなり、保安大学校の構想になる。その設立の目的は4年間の教育訓練を通じて円満な人格、優秀な頭脳、強健な身体を兼ね備えた立派な人物を作り、幹部保安官、幹部警備官として優秀であるばかりでなく、一般社会人としても優れた人物を養成するとある。

この陸・海・（空）の3軍の士官学校にとって最も重要な問題はこれを託する学校長の人選であった。これには吉田首相が自らこれに当たり横校長が就任したことは防大生に語り継がれているところである。横校長の教育の理念は、この要綱の具体化という形で防大生の底流に流れている。それをその後の改革・発展の歴史の中で見てみる。

3 学校の改革・発展

保安大学校は昭和29年7月1日防衛大学校と校名を改め、同時に従来学生は陸・海要員のみであったのを航空要員も含めて教育訓練することとなった。その後本校は教育・訓練、学生生活、校友会活動等、様々な分野で改革が行われてきた。

(1) 教育訓練課程

ア 本科教育課程は工学の専門教育4専攻（機・電・土・化）、5外国語講座、陸・海保安学をもってスタートした。その後教室制度（9教室）発足（昭.30.9）2教室、2専攻（応物・航空）の増（昭.31.4）、理工学研究科開講（昭.37.4）、2専攻（基礎Ⅰ・Ⅱ）の増（昭.39.4）、2理工系専攻（基礎Ⅰ・Ⅱ）廃止及び2人社系専攻（管理・国際）発足（昭.49.4）、学科改編（理工系14学科、人社系2学科）の実施（平.元.4）、総合教育の導入（平.8.4）、学群制度（6群、21学科・教育室体制）発足（平.12.4）、安全保障・危機管理センター設置（平.17.4）等、教育体制等の改革が行われ発展してきた。

この間平成3年から本科卒学生（第36期生）に学士号が、研究科学生（第29期生）に修士号が授与されている。また、平成9年には総合安全保障研究科修士課程、平成12年には理工学研究科に博士課程が開講されている。平成21年には安全保障研究科の博士課程も開講が検討されている。

本校の教科は、人・社教育を行ない理工学を重視する教育で開始されたが、教育の偏りの是正、人・社教育強化の必要性、「ゆとり」教育への対応、大綱化に伴う総合教育の必要性、更に高度化・国際化への対応の必要性から上記の様な様々な改革・拡充・発展が図られてきており、学生の広い視野と科学的な思考力を養う環境は充実してきている。「ゆとり」教育の確保の必要性から従来の履修単位数は185単位から削減され、現在は152単位で大幅な選択制を導入し学生が幅広い分野にわたり自己研鑽のため活用できる様にしている。学生に幅広い教養と自主積極的な勉学意欲を刺激することを狙いに施策としては頷ける面があるが、一方で未成熟な学生気質に目を向ければ安易な方向に流れている面もある。

イ 訓練課程は開校当初は未完成な面が多く専ら基礎的技能の練磨と気力・体力の増強を図ることを目的に米陸士・海兵のやり方を参考とした。週2-3時間の課程訓練を課し、休暇期間を割いてその前後に年間6-8週間の定期訓練を設け、実習を主体として集中的に訓練を行う方式であった。この方式は現在も踏襲されている。第1学年には一律に共通訓練を課し、第2学年以上を要員別訓練とすることも同様であった。訓練時間は昭和33年まで1,116時間であった。開校から約10年間陸・海・空幕は訓練要求基準を示していなかったが、昭和39年からは陸・海・空の訓練要求基準に基づき要員訓練の強化を図った。この際の訓練時間は1,176時間であった。昭和60年に共通訓練の強化・要員訓練の充実が図られ（訓練時間変更なし）たが、平成元年にゆとり教育施策の一環で訓練時間が1,005時間と削減され現在に至っている。他国の士官学校とは違い当校はゆっくりと育て上げるわが国の幹部養成システムであり訓練時間を

大幅に増やす必要はないが、各要員に近づくためのマインドの養成、基本・基礎的事項、規律心の養成の訓練等は最低限実施しなければならないと思う。

(2) 学生舎生活

学生舎生活は小原台に移り学生舎が完成してからは学生隊の大隊編成は昭和31年から昭和53年までは5個大隊、昭和54年以降現在まで4個大隊編成である。学生舎編成は昭和31年(4期)から昭和53年(26期)までは8人部屋、昭和54年(27期)から昭和62年(35期)までは学生舎の増築により4人部屋、昭和63年(36期)から平成4年(40期)までは学生舎の改修により逐次同一学年2人部屋、平成5年(41期)から平成8年(44期)まで完全同一学年2人部屋となる。平成9年(45期)から部屋編成のあり方を根本から見直し、4人部屋に復帰。平成16年(52期)からは新学生舎の完成に伴い、8人部屋に移行中である。部屋編成の考え方は昭和55年(28期)までは学年要員専攻混合、同一学年要員専攻混合、学年混合単一要員等1学年から4学年までいわゆる混合方式を採用していたが昭和56年(29期)から平成8年(44期)までは混合方式から決別をしている。このことは防大伝統の学生舎生活における連続性の中断である。平成9年(45期)からは連続性を回復すべく混合方式に戻している。

昭和50年代に学生舎が3棟増築され、従来の8人部屋が4人部屋、更に2人部屋に変わり同時に学生隊が改編されたことは学生の生活環境は大きく改善されたが、反面、規律のゆるみ、馴れ合いや放縦な行為が目につき、規律違反の事案も多く生じた。部屋編成等について何度も試行錯誤が繰り返され、慣行が一掃されたり、ある一定の成果もあったが、横校長が学生舎において「規律及び服従の真髄を体得することを望み」「共同生活の営まるところ規律なくして自由の生活はない」、「防衛大学校において修得さる重要な教科の1つ」と言った、学生舎生活の目的に照らすならば、この施策はいかかなものだったかと思う。

学生舎生活は防大が目指す全人教育の基礎であり、規律ある団体生活を営む中で将来の指揮統率の基礎となる服従とリーダーシップを学ばせ、また、一方では日常生活を送る上で人としてあるべき言葉使いから、朝夕の挨拶、服装容儀、食事マナー、対人関係のあり方、異性との交際等群教育をする場である。服従と指揮、責任と権限の意味や権限行使の方法などを体系的に学び、学年が上がるに従い責任が重い立場が与えられ、段階的に指揮統率のあり方を学び指揮官としての資質を養う仕組みになっていた。これが少人数部屋でしかも同一学年部屋編成では、段階的、体系的に体験する環境ではない。現在は8人部屋混合編成への移行開始から4年目であり、まだ全員が多人数混合システムの中の体験をしていない。このシステムが定着するまではこの体験により育っていった学生が指導官等となって指導に当たるようになるまで少し時間がかかると思われる。この貴重な体験は陸・海・空の幹部自衛官となった場合、隊員の営内班等の服務指導にも大きな影響を及ぼすものと思う。陸に関して言えば多人数混合方式から決別をして育った学生の中ですでに第1線普通科連隊長が誕生している。陸・海・空自とも隊員の服務指導に頭を悩ましている昨今、「規律及び服従の真髄」の体験をしないまま卒業した防大出身幹部の影響を危惧している。

(3) 校友会活動

体育部(11個部)と文化部(12個部)でスタートした校友会が設立されたのは昭和28年11月3日のことであり「学生の自発的に行う各般の活動」の主体をなす校友会活動は教育訓練、学生舎生活とともに防大教育の3本柱の1つとして重要な役割を果たしてきた。昭和29年に体育部は対外試合専門の運動部と校内競技専門の競技部に分離、昭和34年4月特別体育活動の制度が導入され、学生を第1部(校友会運動部を対象)と第2部(運動部以外の者が全員参加して基礎体力を練成)のどちらかに所属させ、体育活動を計画的に推進した。その後、昭和39年以降、特別体育活動は教育課程体育の中に吸収され逐次廃止され昭和42年運動部は完全に独立、現在に至っている。長年練習施設に恵まれなかった各運動部の施設は極めて充実している。しかしながら、対外成績は一部を除いて低調である。入校時の優技者の不足、低体力者の存在等、根本的な従来からの問題は依然あるが、それよりも、入校時素人、初心者であろうと勝利を目指し情熱を燃やして全力で毎日練習に励む姿勢が大事である。学生としてリーダーシップ・体力・気力練成の絶好の場であり、特に運動部の充実・発展を期待したい。

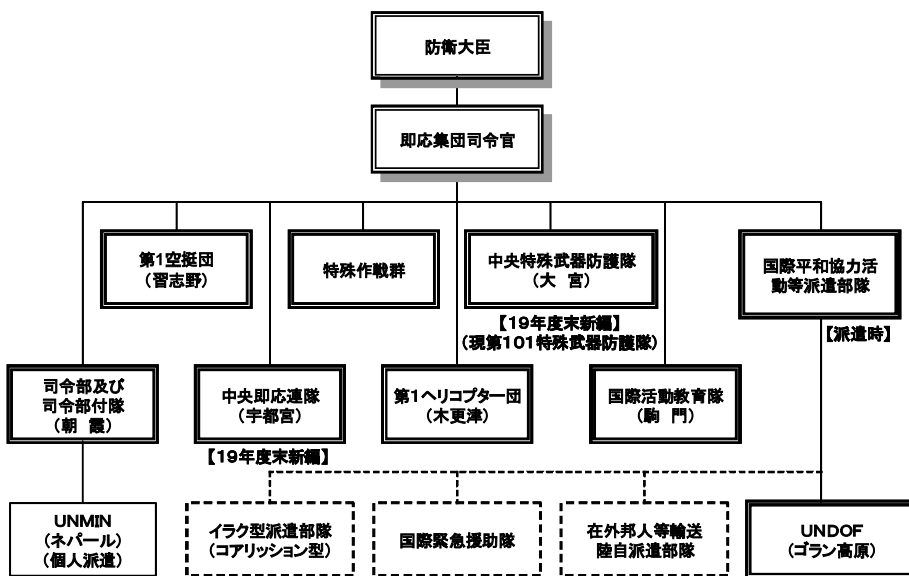
4 結 言

教育・訓練、学生舎生活、校友会活動の歴史と現状について述べたが、横校長が1期生に「諸君の課程を我々は3つに要約して考えております。すなわち1つは人としての修養練成であり、他の1つは工学ならびに保安・警備の学問に関する基礎・知識の習得であり、さらに他の1つは指揮・統率の資格を具うこと」と訓示した様に学問の工学が理工学及び人文社会学に、保安・警備の学問が防衛学に変わろうとも本校は国防を担う堅実な幹部要員養成学校であるという原点を忘れてはならない。そのための教育・訓練であり、学生舎生活であり、校友会活動である。現在の学生も大半の者が、このことをよく理解して毎日努力しているが、まだまだ不十分なところが散見される。学問あるいは校友会活動のみに偏り、著しくバランスを欠く者、3本柱のいずれも毎日を単なる消化に終わり受動的に過ごしている者がいるのを大変残念に思う。現在防大は五百旗頭学校長の方針のもと学生の精神的拠点の場として横記念室の設置を準備している。開校から55年、学校も還暦を迎える時期に来ており、横校長以下の先人が築いた伝統とは何かを今一度確認し将来へ向けてしっかりと受け継ぎ発展させなければと痛感している。防大が開校した時からの連続性の中に自分が存在し、心の中から湧き出る様な形で意識された時、学生は自分自身に誇りを感じることができ、力が生まれてくるのではないだろうか。「連続性の中断という断層は生命力を枯渇させる」という有名な言葉があるが、この伝統という連続性の大切さだけは学生に伝えていきたいと思っている。

昭和29年6月26日吉田茂は保安大学校学生に対し「横校長の言うように私は保安大学校の生みの親であるが、生みの親の責任も重大だがその親の子として諸君が国を双肩になう決意がなければ諸君は不肖の子となる」と訓示したが、この言葉を重く受けとめ我が国をしっかりと背負うことの出来る志操堅固な若人を育成したい。

哲学者森信三は「教育は流水に文字を書くように果かない業である。だがそれを巖壁に刻むような真剣さで取り組まねばならぬ」と述べている。真剣に学生教育に当たってきたい。

中央即応集団の編成



っています。

③国際平和協力活動に関わる教育担任・支援

国際活動教育隊をもって、将来のPKO等の要員の人的縦深性と即応性を確保すべく、幹部及び陸曹の課程教育（20年度から、年間各4個課程、各30名程度）を担任するとともに、各方面隊の国際平和協力活動等の待機部隊の錬成訓練を支援しています。

6 おわりに

CRFは、米・英・豪等の列国が保有する、所謂「特殊作戦部隊」でもなく、陸上自衛隊各方面隊の様に、砲迫

火力等の大火力や戦車等の装甲機動力を有する大部隊とも異なります。しかしながら高い即応性を要求され、特殊で専門的な能力を有する部隊の集合体であり、小粒でもピリッと辛味の効いた部隊として、集団一丸となって「所命必遂、世界最強を目指す」を合い言葉に、日々訓練に邁進しているところです。防大の現役学生諸君には、是非、「陸上自衛隊中央即応集団」の一員を目指して頂きたいと期待しています。

なお、インターネット上にホームページ（「中央即応集団」で検索）を開いていますので、多数のアクセスとご意見をお待ちしています。

地方協力本部の今



愛知地方協力本部長

盛 一 丈 嗣 (22期・陸)

防大同窓会会員の皆様におかれましては、全国津々浦々いや世界において、お元気で多様な職域でご活躍のことと思います。愛知地方協力本部は幸いなことに18年度の募集成果等により初代防衛大臣から栄えある第1級賞状を受賞することができました。これも皆様方のご厚情の賜であると感謝しております。この場をかりて御礼申し上げます。さて、今回本コーナーにおいて地方協力本部（以下「地本」）の業務等をご紹介します機会をいただきましたので地本の現況等について述べたいと思います。

地本は、地方連絡部（以下「地連」）として昭和29年に発足し、昨年7月地本に改編されました。地連当時の

任務は、自衛隊法で、「自衛官の募集その他長官の定める事務を行う」と定められていましたが、地本においては、「地方における渉外及び広報、自衛官の募集その他防衛大臣の定める事務を行う」と改正されました。訓令では、その細部を、●自衛官、予備自衛官、即応予備自衛官、予備自衛官補、防衛大学校又は防衛医科大学校の学生及び自衛隊法第98条第1項の規定により学資金を貸与される者の募集に関すること ●予備自衛官及び予備自衛官補の人事、人事記録、招集及び手当等に関すること ●即応自衛官の招集等に関すること ●自衛官の募集に伴う広報に関すること ●自衛官の再就職援護業務の実施に関する

◆◆新編・改編の部隊で活躍する同窓生◆◆

こと ●その他長官から特に命ぜられた事項に関することとされていましたが、地本になり変化した事項は、上記項目に ●部外との連絡協力に関することが追加され ●自衛官の募集に伴う広報に関することが、総括的に ●広報に関することと定められたことです。

地連が地本になって、一番の任務が渉外広報になったの？ いえ違います地本の一番の任務は募集で、これは発足当時から、今後自衛隊がなくなる限り未来永劫変わらないでしょう。愛知地本は「大地本」の一角を占めています、定員は地本全体で30数名（内事務官約20名）、募集に関わる人員は、本部募集課約10名及び2個出張所に合計7名（内事務官5名）合計20名足らずとなっています。愛知地本でもその規模なのと驚かれる方がいらっしゃるでしょう。ちなみに、1回の一般2士の試験を実施するのに実働50名以上の人員が必要となります。そうです、地本（地連）の編制は自衛隊発足当時の、有り余る志願者を捌くだけの事務的業務処理の人員でしか積まれていないのです。そこで諸先輩方のご努力により、人員については定外勤、施設については募集事務所等の設置の処置がとられ、現員では約160名、施設については13個の出張所及び地域事務所等を有しています。

防衛白書の説明で各市町村を回っていると、ある首長が「近年の公務員離れて役人の受験者が減り、やはり10倍程度だと中にちょっとという人が混じってきますね。」とおっしゃれましたが……。愛知地本の入隊目標は2士男子だけでも平成18年度で250名前後、首長さんの言われるように、10倍の受験者は夢でも、3倍以上の受験者がいないと必要な入隊者数を確保することはできません。最低750人の受験者が目標となります。では、愛知県の雇用環境はというと、トヨタに代表される大企業等の好調で、今日本で一番元気がいいといわれていますが、有効求人倍率は2倍を超えて高止まりしています。この2倍もすべての年代すべての職域の求人をならした数字であり、もし自衛隊を警備関連職域とすると、統計にある愛知県の24歳以下の有効求人倍率は28倍にもなっているのです。

職業的な軍隊の持つ特性は、英語でもサービスといわれますが、職業として認識されにくいことです。近代以

降は、国家等からの強制もありますが、人々が国家に対する奉仕としてその任についてきました。法的にも職業安定法の適用除外であり、学校等における就職指導等においては他の職業と区別され無意識下で職業として認知されにくくなっています。また、職業として認知されても、昔から3K（危険、きつい、汚い）職業と思われてきました。

ともすれば、とても目標に足る人数の受験者がいない。高校等の学校へ行ってもすでに就職が決まっている人ばかりで話も聞いてもらえないと悲観を乗り越えて悲壮な面持ちで後ろ向きの姿勢のまま不特定多数の適齢者に接してしまふことがあります。

しかしながら、「一人一人の命は地球より重い」と言われていた頃、普賢岳の火砕流災害に遭遇した市長さんが自分の命の危険を顧みず任務にあたった自衛官を見て「人の命よりも大事なものがあることを知った。それは使命感だ。」と言われました。「他の職業にない崇高な使命を自己の生き甲斐とする人がまだまだ日本にはいるはずだ。また多種多様な職域を持つ自衛隊の職業としての魅力を知れば自衛隊に入隊したいと思う人たちが必ずいるはずだ。少なくとも我々自身が一番自衛官の魅力を肌で感じ、それを知っている。我々の募集という任務は、いない人を探すのでも、希望しない人を振り向かせるのでもなく、潜在的にそういう思いを持つ人たちがどこかで待っているのだから、少しでも多くの人たちに自衛隊を知ってもらうことから始めるんだ。自衛隊が自分たちの手の届くところにある魅力ある職業だということを知りたいと思っている人が待っているんだ。今、そこを歩いている若者がその一人かもしれない」と、広報官に話し、広報官の気持ちを常に明るく前向きに維持できるよう、同じ気持ちを共有できるよう努力しています。

きれいなことを述べましたが、いかに前向きな気持ちを持とうとも、今、全国の地本では、広報官が血のにじむ努力をしています。最後に、一人でも多くの人に自衛隊の魅力を知っていただき、よき後継者が育ちますよう、会員の皆様方にご支援ご協力、特に最寄りの地本等に対する適齢者情報の提供をお願いいたします。



UNDOF（国連兵力引き離し監視隊）に参加して

第22次ゴラン高原派遣輸送隊長

高橋 洋 二（37期・陸）

平成18年9月から19年3月までの間、第22次ゴラン高原派遣輸送隊として、UNDOF（国連兵力引き離し監視隊）に参加する機会を得ました。

ゴラン高原派遣輸送隊の任務は、「UNDOFの後方支援大隊に配置され、後方支援分野における国際平和協力業務に任ずる」であり、その主要業務は、①食料品等の日常生活物資等の空港、港等からの輸送、②UNDOFの補給品倉庫における物資の保管、③活動地域内の道路等の補修、④道路等の補修に必要な重器材等の整備、でした。日本が10年以上継続して参加している、国際平和協力業務ですが、この機会に現地で感じたことについて皆様に紹介したいと思います。



山地にある宿営地の除雪作業

1 現場対応

UNDOFで業務を行っていて、全然、日本の仕事の仕方と違うなと感じたものは、総ては現場で決定することである。これは、自衛官の感覚としては、計画されたことはある程度計画通りに進み、変更される場合はそれなりの理由があると思っていた。しかしながら、UNDOFでは、計画が当日に変更になるのは通常であり、その変更の理由もなく、連絡も来なかったりすることが普通であった。隊員は「なんできてないの？」と自分が間違っただのかと心配したり、「なんでこないんだ！」と腹を立てたりしていた。また、荷物を運ぶ場合も、当初の予定と違うものを突然運んでくれと言われたり、全然違う場所に持って行ってくれと言われたりして、どうすればいいのか迷うことがよくあった。しかし、心配したり、迷ったりしていると時間だけが浪費され、その日の仕事が出来なくなるために、現場で調整し、現場で決心し、仕事を処理していくことが必要とされた。隊員も派遣当



作業の要領について現場で調整

初は、戸惑いの方が大きかったが、一月もすると現場で一番良いと思われる方法を考えて、調整して仕事をするようになっていった。

海外で活動する際には、仕事に対する感覚の違う人々と協力して業務を行う必要があるために、準備も大切だが、そのときどきで臨機応変に対応し、仕事をしていくことが要求されると実感した次第である。

2 車両運行

ゴラン高原に派遣されて、隊員が一番最初に衝撃を受けたのは、現地での車の運転についてであった。到着直後の移動する車の中で、全員が眠いのも忘れて、窓の外を見て唖然とした表情をしていたことから、その衝撃の大きさを想像できる。

日本隊は名称にもあるように、UNDOFの輸送部門を担当し、車両を運行する頻度は非常に高い。仕事に直結する車の運転については、日本国内で左ハンドルやトレーラーの運転を練成してそれなりに各自自信を持って派遣に望んだが、現地での交通マナーは想像以上のものであった。

無理な追い越しは日常茶飯事であり、逆走や突然の停止、2車線なのに3台併走等、日本では考えられない事ばかりなのである。事前の情報として日本とは全然違うということは、十分に認識して現地に行っていたが、日本の常識は全く通用しないというのを痛感させられるものであった。

隊員も最初はおそろおそろ運転をしていたが、1000kmも運転をする頃には慣れたもので、ドキドキする感覚は麻痺し、危ない運転はある程度周りの状況から予想できるようになっていった。派遣された責任感もあると思うが、隊員の順応性の高さを知ることが出来た。



無理な追い越しをかける現地の車

全く文化の違う地域で活動するためには、派遣国の文化を否定することなく、受け入れていくことが必要であり、順応性というのは初めての仕事をする上で重要な要素であるということを学んだ次第である。

3 健康管理

現地で活動する上において、必要となってくるのは、隊員自身の健康管理である。派遣された隊員は一人一人が仕事を持っており、一人の不調が派遣隊に影響を与えることになる。よって、風邪はもちろんのこと下痢や怪我等にも十分に注意を払いながら生活することが必要とされる。現地では「ヤラヤラ」といっていた下痢があり、生水を飲むことはもちろんのこと、町で売っている生ジュースや氷等にも注意が必要で、少しでも気を抜くと2～3日寝込むことになる。幸い一度に多くの隊員が下痢になる事はなく、隊としての仕事に大きな影響を与えることは無かった。

用心しすぎて現地の日本人の方から、心配しすぎではと言われたこともあるが、自分の体のことは自分で管理すべきであり、少しの気のゆるみが体調に直接影響するというのを身をもって体験できるいい機会になった。また、健康管理の重要性を再認識させられるものであった。



宿営地に荷物（水）を卸す作業

4 業務引継

ゴラン高原派遣輸送隊は、各次隊が半年ですべて交代する方式で、業務を継続している。このための業務の引き継ぎ期間は2週間有り、現地での業務要領をこの期間で引き継ぐことになる。我々も前次隊から業務を申し受けたが、嵐のような多忙な2週間であり、自分達だけになったときには、多少なりとも不安があった。各次隊感じている不安とは思うが、少しでも軽減するための努力は必要と考えている。よって、現地での業務の要領を現地に来なくてもある程度想像できるように十分な説明を加えたものを各係毎に整理して申し送り資料として作成した。

各次隊作成しているものを集約及び加筆して最新版に修正したものであり、現地の業務に沿ったものを作成できたと思っている。しかしながら、全てにおいて十分なものが作成できたわけではないので、逐次修正を加えていくことが必要である。これにより、数次隊後にはある程度の完成度あるものが出来ると考えている。今後の派遣部隊に期待していきたいと思う。



到着直後から始まる業務の申し送り

5 最後に

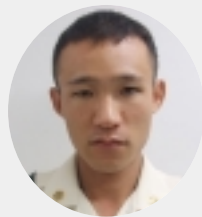
現地での業務は、色々なものを学ぶことができ、また、自衛隊の活動に対する他国からの高い評価を初めて知ることもでき、非常に有意義なものでありました。自分達の今までの仕事に誇りを持つと共に、このような貴重な体験をさせて頂いた方々に感謝したいと思います。



全員揃って最後の記念撮影

防大51期生に聞く

後輩に伝えたいこと



陸上自衛隊幹部候補生
陸曹長 小宮 祥吾

「小隊長戦死!!」ここから我々精強3区隊の訓練は始まりました。それは残暑の厳しい9月中旬に行われた大矢野原野営訓練出発前の隊容検査が始まって、5分と経たない時のことです。小隊長の役職に就いていたA候補生は小隊長に対する統制の徹底が不十分であったという理由で区隊長から戦死を告げられました。先任者が戦死したならばすぐに次級者が指揮を執る、戦争映画などでもお馴染みのケースであるので皆さんにもよくわかると思います。その時の区隊の次級者は小隊長に就いていた私でした。私はすぐに小隊の前に出て小隊を指揮し、予定通りの検査の準備を始めました。我々候補生に区隊長が常々言われる「常に自分が小隊長になったらどうするか考えろ! 腹案を持て!」を実践するのですが、そのときの私は小隊長という役職にいながら、まさかただの隊容検査で最初から小隊長は戦死しないだろうと、高を括っていました。当然腹案などありません。しかしながら小隊長に上番したからにはそれまでの状況に関係なく、小隊を適時適切に指揮しなければならないのです。隊員の前で小隊長が迷っているわけにはいきません。私はとにかく必死に声を出し、小隊を指揮しました。その指揮っぷりは非常に冴え、まさに右往左往という感じで、とても当初のA候補生の指揮には遠く及ばないものでした。それでも一部に改善すべき不備があったものの無事に検査を終えることができました。

後輩へ送る言葉

—「座右の銘」の重要性—



海上自衛隊幹部候補生
海曹長 林 大佑

4年間の青春と思い出の詰まった小原台を去り、帝国海軍の時代からの伝統を誇る江田島に来て早半年が過ぎました。我々が海上自衛隊幹部候補生学校の生活は噂どおりの厳しい生活で、多くの教官の方々や「鬼」からの、厳しく、熱く、時に温かい指導の下、候補生同士で切磋琢磨しながら日々を送っています。

突然ですが、皆さんは何か一つ自分にぴったりの「座右の銘」を持っているでしょうか。ご存じのとおり、「座右の銘」とは、「常に身近に備えて戒めとする格言」のことです。今回、この「座右の銘」に関する話を、特に52期以下の後輩たちに送りたいと思います。

最初に、私が防衛大学校1学年の頃の話をししたいと思います。

隊舎に戻ると、疲れきった私にA候補生をはじめ、同期のみんながねぎらい、励まし、賞賛など様々な声をかけてくれ、一人たりとも文句を言ったりけちをつけたりするものはいませんでした。あれが駄目、これが駄目と言われてもおかしくない内容でしたが、みんなは私の必死な姿がよかったと言ってくれました。

このことから私は二つのことを学びました。一つは小隊長、あるいは初級幹部のあるべき姿についてです。我々幹部候補生はもうすぐ部隊へ行き幹部となります。その時我々には、現場を知り尽くした古参の陸曹から、新隊員教育を終えたばかりの若い陸士まで、様々な隊員の部下がつき、それらの隊員を指揮していかなければなりません。そんな時に部下を動かすものは小隊長の必死な姿であるということです。たとえ能力が少し足りなくても、全力で必死にやれば部下はついてきてくれると思います。もう一つは同期の絆です。どんなに疲れていても、同期とならば励ましあい、苦難を乗り越えられます。隊容検査でも、同期がうまく動いてくれたから、無事に終えることができたのです。また今期からBU一体化に伴い、同期の数が増えました。このことは素晴らしいことであると私は思います。

後輩のみんなに伝えたいことは、“常に失敗を恐れずに全力を出せ! 同期を大事にしろ!” 以上2点です。

幹部候補生学校は多くの同期と本気で切磋琢磨できる場所です。防大の様に要員や学科の違いはありません。将来、普通科に行きレンジャーになりたい人、ヘリのパイロットになりたい人、国際貢献活動に参加したい人、薬剤師として自衛隊医療を支えたい人、戦車がすごく好きな人、いろんな人がいます。しかし全員同じ教育を受け、同じことに熱くなれます。また教官、助教の方々、寝る間も惜しんで我々の成長を手助けしてくれます。その期待に応えて下さい。

部隊で会えるのを楽しみにしています。

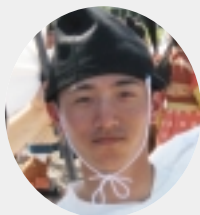
防大における1学年の生活は、2、3、4学年といった、約3倍の数の上級生に囲まれたとても厳しい生活です。各学年の立場を表す言葉に、「4学年は神、3学年は人間、2学年は奴隷、1学年は石ころ」というものまであったほどです。幹部候補生学校の生活同様、精神的、時間的ストレスの下で日々闘っていました。そして、ときには心が折れそうになるような出来事もありました。

そういったときに心の支えとなった言葉がありました。それは1学年の前期、小隊指導教官の朝礼の時に紹介していただいた「何とかなるさと楽観し、何とかしようと努力する」という言葉でした。何か困難なことにぶつかったとき、初めから「もうだめだ」と悲観してはいいい方向に進むはずがなく、まずは「何とかなる」と楽観する、気持ちの余裕を持つことが大切であり、また、ただ楽観するだけで何もしないのはただの現実逃避であり、何とかしようと全力で努力することが大切である、という意味の言葉であると、自分なりに解釈しています。この言葉は私の性格に見事に当てはまり、以後、私はこの言葉を「座右の銘」としています。また、これから先の自衛隊生活に対する「意気込み」を表す言葉でもあります。この言葉は、日常生活からテスト勉強、果ては緊急事態等にまで幅広く当てはまる言葉であり、とても気に

入っています。

後輩の皆さんは遠からず防衛大学校を卒業し、幹部候補生学校を経て各部隊へ配属され、多くの部下を持つこととなります。部下には、しっかりとした目標を持って勤務に当たっている者もいれば、目標が定まらず悩みを抱えている者もいるでしょう。そういった部下たちに明確な目標を与え、各人、ひいては部隊の士気を高揚させることが、幹部自衛官として果たさなければならない重大な責任の一つであると考えます。その責任を果たすための効果的な手段として、私は「座右の銘」となる言葉を部下に紹介することを勧めます。なぜならば、私がそ

将来を見据え、今最善を尽くせ！



航空自衛隊幹部候補生
空曹長 東 裕司

1 はじめに

まず、防大を卒業したばかりの私に、このような発言の機会を下さったことを光栄に思うと共に非常に感謝しております。さて、私は防大3学年時に大韓民国空軍士官学校（以下、空土という。）に留学をしました。そのため、今回は防大卒業生としてだけでなく、空土の留学生として、幹部自衛官の卵としての立場から私なりの「防大の意義」と「防大生に望むこと」を述べたいと考えます。

2 防大の意義

私の考える「防大の意義」、それは「学生隊運営」と「絆の形成」の2点にあります。その答えに行き着いた経緯について以下に述べていきます。

そもそも、私が「防大の意義」について考え始めたのは、3学年の留学時からでした。というのも、1学年時は、清掃、プレス、お湯換え、配膳等、日々の生活を送ることで精一杯であり、2学年時は学科勉強や部活に脂がのり、留学準備にも追われていたためです。留学について補足をすれば、空土留学は防大48期生を初代とし、ほぼ毎年1名ずつ空土に1年間の長期派遣を行っているものです。私は幸運にもそのチャンスに恵まれ、3人目の派遣学生として韓国を踏み出しました。そして、この留学が私にとって日本、防大を客観的に見る絶好の機会となりました。

空土で特に私が感じたことを列挙すると、次の3点が挙げられます。①士官候補生としての誇りを持っている。②規律が厳正で、上級者への服従心が強い（基幹隊員主体）。③空土生徒の絆は強いが、3軍の交流が少ない。

1点目の「士官候補生としての誇り」に関して言えば、私が在学時の防大生には誇りを持たず、己の身分を隠す傾向がありました。しかし、空土の生徒は外へ出ても堂々としており、その姿を素晴らしく感じました。国や立場は違えど、防大生も見習うべきであると思います。

しかし、2点目の「学生隊運営」に関しては、学生隊での指導が非常に形式的で、問題の本質を捉えるというよりは、単に規律違反を取り締まるといった印象を受けました。これに対し、防大は問題の本質を学生なりに考えて解決しようとする姿勢がみられます。この、問題を「考える」ことは将来幹部として勤務する上で重要になると考えます。

そして、最も重要なのが3点目の「絆の形成」です。

うであったように、部下にとっても心の支えとなり得る言葉となるかもしれないからです。実際、私は防大1学年時に教官から言葉の紹介があったからこそ、ときに厳しいこともあった防大生活や、現在の幹部候補生学校での生活を有意義に過ごすことができていると言っても過言ではありません。ぜひ、自分の「座右の銘」を見つけてもらいたいと思います。

「座右の銘」は、過去の偉人の言葉のような難しい言葉でなくても結構です。皆さんも、私の「座右の銘」のように、単純明快で自分にぴったりの言葉を探してみてください。

防大の特徴とも言える陸海空合同の体系は、各自衛隊の相互理解と統合運用の観点から重要であると学んだものの、留学に行く前までは特に意識することはありませんでした。しかし、空土と幹部候補生学校の防大課程以外の者の現状を見る限り、その絆の深さには格段の違いがあると感じました。

現在の自衛隊は、様々な事態への対応が求められ、任務が多様化されており、統合運用の必要性はより一層高くなっています。そのような中で、当初から強い絆で結ばれた我々にとって統合任務は障害にはならないでしょう。

これらの点から、学生自身が問題の本質を自ら考え、それを解決しようとする「学生隊運営」と、陸海空、先輩後輩を問わない「絆の形成」が防大の特徴であると言えます。すなわち、これが「防大の意義」そのものなのです。

3 防大生に望むこと

まだ部隊を知らない私が堂々と口にできることではありませんが、一先輩として、防大生に望むことがあります。それは、将来を見据え、何事にもよく考えることです。防大生は、毎日が忙しく矢の如く時間が過ぎていることは百も承知です。しかし、だからこそ未来を見失いがちになり、自分が今何をしているのかが不明瞭になってしまう人が多いのです。

防大は、学生主体であるが故、普段の生活において学ぶも自由、学ばざるも自由です。しかし、防大生に求められるのは、幹部としての資質の涵養であり、その限界はありません。与えられたことだけをただ受け入れるだけでなく、自分は何故それを学んでいるのか、何故それを行う必要があるのか、普段の何気ないことであれ、その本質を理解することが必要です。物事を深く考え、同期と共に討論すれば、意見の対立もあることでしょう。一生懸命議論し、わからないことがあれば先輩に聞けばいい。大切なのはその考える過程なのです。

防大生の「考える力」とそれを「伝える力」を涵養するためには、もっと討論の場が必要です。そのきっかけ作りとして、防大の履修科目の中にも幹候補校の総合研究のような討論の場が増えたら良いと思います。

4 おわりに

私は、自衛隊という組織に入隊してからまだ5年目であり、生まれてから数えれば、3割にも至りません。しかし、その間に得た経験、知識はこの人生の中で得たものの大部分を占めるのではないかと考えます。当初、私は災害救助活動を行う自衛官の姿に憧れ、この防大の門を叩きました。それから、一般大学と同様の大学教育に加え、自衛官としての基礎訓練、そして韓国への留学と、本当に良い経験をさせていただきました。その恩返しの意味も込め、日本防衛のために今後も自学研鑽に励み、組織に尽くしたいと考えます。最後に現在、防大で頑張る後輩の皆さんにも一言、『将来を見据え、今最善を尽くせ！』



雑誌「小原台」について

元防衛大学校長 松 本 三 郎

学校長の任務を終えて7年余が経ち、小原台時代が懐かしく思われ、在任中にはゆっくり読めなかった防大往時の資料に時折目を通してのいる昨今です。とりわけ、今や半世紀を超えた防大草創期の諸事情には関心も深いのですが、その頃の学生生活や学校環境、また学校長はじめ諸教官の教育訓練にかかわる考え方などを知るのに便利なのが、学生自身の手により編集刊行されてきた校友会機関誌の「小原台」です。

防大6期の二見さんが、私の会長を務める(財)防衛大学校学術・教育振興会にその3号から20号までの18冊を寄贈してくれたのを契機に、私の所有する冊子を含め当会事務所に1式全部を揃えようと考え、防衛大学校に問い合わせたところ、先日図書館によく第1号から第87号までを1部揃えることができたことと、余部のあったものを送ってくれるというご返事がありました。それでもなお全体の約半分の欠号があります。そこで同窓会の皆さんにお願いすることにしました。もし以下の欠号をお持ちで、財団にご寄増いただけるものがあれば大変ありがたくぜひご一報いただければ幸いです。

欠号（発行号、発行年月）

1号 (30. 1)	2号 (30. 7)	23号 (37. 7)	24号 (37.11)	25号 (38. 3)
26号 (38. 7)	27号 (38.12)	28号 (39. 3)	29号 (39. 7)	30号 (39.12)
31号 (40. 3)	32号 (40. 9)	33号 (40.12)	34号 (41. 3)	35号 (41. 7)
36号 (41.11)	37号 (42. 3)	38号 (42. 6)	39号 (42.11)	40号 (43. 3)
41号 (43. 7)	42号 (43.11)	43号 (44. 3)	44号 (44. 8)	45号 (45. 3)
46号 (45. 7)	47号 (46. 3)	48号 (46. 8)	49号 (47. 3)	50号 (47.11)
51号 (48. 3)	52号 (48.11)	53号 (49. 8)	54号 (50. 3)	55号 (50. 9)
56号 (51. 3)	57号 (51. 9)	58号 (52. 3)	60号 (55. 3)	61号 (56. 3)
62号 (57. 3)	64号 (59. 3)	65号 (60. 3)	66号 (61. 3)	67号 (62. 3)
68号 (63. 3)	69号 (1. 3)			

以上ですが、もし複数のご寄贈があれば、同窓会本部や防大の「小原台編集室」にも揃えておきたいと思います。私の目からみれば、雑誌「小原台」は、学生目から見たその折々の小原台における学生生活や学校の雰囲気を生きたと伝える歴史の「語り部」であり、防大関係者にとっては後世に伝えたい貴重な財産といつてよいものです。

「小原台サロン」に出てくる数々のエピソード・失敗談に、当時の素朴な学生の姿を想像し思わず笑いを禁じえませんでした。「税金泥棒と言われ口惜しがった学生の言葉」に強い同情と発言者への怒りを禁じえませんでした。幹部候補生学校に巣立った先輩達の母校の後輩達への便りは愛情と激励に満ち満ちたものでした。海外留学生だより、駐在武官だより、各種旅行だより、それに運動部や文芸部の活動報告にも興味深い記事が数多くありました。防大の公式記録が「10年史」、「20年史」、「50年史」とあり、諸般の事情から「30年史」、「40年史」を欠いていたものを、「小原台」の30周年記念号（63号）や40周年記念号（72、73号）が見事に埋めてくれました。

実際私が防大学生歌や逍遙歌の誕生の経緯を田崎さんや塩瀬さんから知ったのは、この40周年記念号を通じてでした。卒業生一口メモには懐かしい人たちの名前を見つけ、その若き日の面影を懐かしく思い浮かべました。

それにしても雑誌「小原台」が初期の良い意味での自由奔放な熱気あふれる編集方針と内容に比べ、次第にマンネリ化し元気を失っているかに見えるのは心配です。校友会活動は、教育訓練、学生舎生活とともに防大教育の三本柱の一つです。その校友会機関誌「小原台」の活性化のためにも、現役学生諸君、とりわ「小原台」の編集委員の諸君が、温故知新の意気込みでその大切な任務と伝統を受け継ぎ発展させてもらいたいと願って止みません。

■連絡先 財団法人 防衛大学校学術・教育振興会
TEL 03-3268-4951

今人生、男盛り

卒業50周年を迎えて

森野 安弘（1期・陸）



私達防大第1期生は今年、卒業50周年を迎えた。

昭和32年、小原台を巣立ち、自衛官として第1歩を踏み出して以来本日まで50年、半世紀に至ったのである。

この歴史的とも言うべき年を記念し、今年の1期生会総会は「卒業50周年記念総会」と銘打った。しかしながら、私達が慈父の如く敬慕して止まない榎校長の後に榎なく、久里浜の仮校舎時代から指導薫陶を戴いた関係教官方も高齢であり、お招きするは不躰と心得、特別な企画はしなかった。

参会してくれた同期の諸君が来賓であり、主体である卒業50周年を共に祝った。

卒業後50年、半世紀を経たということは我々防大1期生は歴史的な存在になったということであろう。即ち、歴史的な視点で後世の評価を受けるに至ったということである。

その歴史を語る時、どうしても榎校長の薫陶即ち榎イズムを語らないわけにはいかない。榎イズムのとらまえ方は人それぞれ思いはあろうが、私はこう思っている。

その1はパイオニアたれ！未知なるもの、困難にチャレンジし、新たなるものを創造していくパイオニアスピリッツ。

その2は紳士たれ！ノーブレス・オブリージ。国家の危難に敢然として赴く忠誠心をもち、信義、廉恥を重んずる良き社会人たれ！

その3は合理と条理に基づく均衡のとれた武人たれ！である。

我々1期生は1・2・3.と続く単なる数字の1ではない。我々の前には防大生はなく、後には陸続と続く後輩がいる。その先頭を切って新たなる価値を創造し、歴史と伝統を創るべく前進して止まない存在なのだ。この精神的支柱が榎イズムであり、これを信条として前進してきた1期生の誇りはここにある。

かくして我々は今も前進を続けている。成熟した人生における最後の坂道を登っている。我々1期生には下り坂はなく、あるのは坂の上を目指す上り坂のみである。何時か必ず来る最後の坂「真坂（マサカ）」に至るまで、榎イズムで挑戦しなくてはならない。我々の後ろ姿を多くの後輩が見詰めている。

それには元気でなくてはならない。元気が1番。その為にこそ同期生の団結と親睦が必要なのだ。

今や人生80年の時代である。我々は疾うに古来希なりと言う70歳を超したが、70歳を「古希」とした杜甫の時代ではない。

「100歳は古来希なり。90歳は奇とするに足らず。80歳は大いに為すべし。70歳は得ること多し」と言う時代ではないのか。

我々1期生はまだまだ得ること多く、勉強し、活躍する年齢なのだ、と自らを奮い立たせ、この50周年を契機とし、初心忘れず、1期生ここにありの気概を持って前進していくべく誓い合った「50周年記念総会」ではあった。

今の人生を愉しむ

楠木 昭（2期・陸）



2学年のとき、同期の鈴木祐助君に誘われて山岳部に入りました。昭和30年の赤倉の冬合宿、31年の蔵王の冬合宿、4年のとき虎田君の誘いによりワングルに移

籍、爾来山とスキーの人生が始まりました。スキーをやりたくて北海道勤務を希望し、冬戦教でニセコの山でしごかれ、八甲田を歩き・滑り、何とか自衛官生活を無事終わりました。

定年後は、会社員となり、市の山岳協会の理事長を勤め、縦走をしたい仲間と小さな山岳会を創設しました。毎月の定例会、定例山行、行きたい山の企画山行・スキーと活動しています。今年で10周年になるので、記念事業として中国シャングリラにトレッキングに行きます。

年に約20回の山行で約40日、約5回のスキーで約20日と併せて年間約2ヶ月、自然の中で「気」を頂き愉しんでいます。この山とスキーを支えてくれているのがトレーニング、週に3回の筋トレ、2回の水泳、1回の真向法です。真向法は股関節を中心としたストレッチであり、体の柔軟性を保ってくれています。



家族と共に、槍ヶ岳山頂

海外の登山・トレッキングは、スイス・アメリカ・カナダ・ネパール・オーストラリア・台湾。台湾の雪山登頂は、ワングル創部50周年記念事業としてOB6人とともに登りました。アメリカの山は独立峰で雪に覆われピッケル・アイゼンの世界、特に印象に残ったのはセント・ヘレンズの登山でした。1回目は悪天候で退却、翌年再チャレンジで登頂しましたが、火口の壮大さに自然の偉大さを痛感しました。その後また噴火したようです。

海外のスキーは、スイスのツェルマット・グリンデルワルド、イタリアのドロミテ、フランスのシャモニー、カナダのウイスラー、アメリカのクリスタル等毎年どこかに滑りに行っています。雄大な景色を眺めながら、様々な斜面を滑るのはこの上もない幸せです。猪谷千春が銀メダルを取った斜面も滑りました。来年は、オーストリーの予定です。

年をとっても滑れるのは、カービングスキーのお蔭です。昔の滑り方からカービングターンのやり方を身体に覚えこませるのに時間がかかりました。（今のスキー板は3本目です）

日本文化を充分に知らないかもしれませんが、異文化を体験するのも良いものだと思います。石の文化を知ったのは、チュニジア・オランダ・ベルギー、古代から現在に至る文明が脈々と生きている。チュニジアの古代ローマ時代の水道・闘牛場の遺跡、オランダの教会の建物、ゴッホおよびレンブラントの絵画等、日本では味わえない時代の流れ、芸術を感じさせられました。インカ文明に触れるため年末にはペルーに行く予定です。

気持ちを落ち着かせるために、仏様を描いています。原画を面相筆で白描し、彩色して穏やかな仏様においでいただいています。無念無想のときはきれいな線を引けますが、雑念が湧くと線が乱れます。一番神経を使うの

は瞳を描くときです。瞳の形で衆生を救済できるか否かが決まるような気がします。人生これ修行の連続の想いです。

あれこれとやる年ではないかもしれませんが、感性のアンテナは高く掲げて電波をキャッチして豊かに生きていきたいと思います。これからも体力の続く限り我が人生を愉しみたいと思っています。

(平成19年9月記)



描いた!! 1,200枚!!

澤井 昌昭 (4期・空)



昭和28年に高校入学と同時に始めた油絵が間もなく1,265枚になろうとしている。正確に記録を取り始めたのは昭和57年頃からだからあるいはもっと多いかもしれない。

どの会派にも所属せず自己流を貫いてひたすらメリハリのある写実を心がけてきたが1,000枚も描けば少しは進歩するのではないかと漠然と考えていた。高校の担任教師がたまたま図画の教師で、おおらかな人柄に惹かれ迷わず美術部に入りごく基本的な油絵の技法を習っただけで、あまり具体的な指導を受けた記憶はない。後で聞いたところでは自由美術家協会の有名な先生で広島では名が知られた人だったらしい。

昭和31年に防大に入り、一応油絵の道具は持って行ったもののほとんど描いた覚えがない。生活の落ち着いた昭和45年頃から再び絵筆を握るようになり、年に数枚は描いていたように覚えている。昭和56年、宮崎県の新田原

基地に勤務していたとき、絵の好きな基地司令がアラートの乗員待機室が殺風景なので何か明るい絵を描いてくれないかという要請を受けて初めて30号(910×727センチ)という大きなものを描いた。近頃の展覧会は100号、200号という大作ばかりで30号など珍しくないが、当時の私にとっては売れる当てのない大作は描くチャンスはないので大いに勉強になった。

そのうちに基地の環境美化に協力しようとして次々に描いて隊員食堂、輸送ターミナルなどに飾っていたら「私にも描いてください」という人が現れ、私の絵が売れるといことに気づいた。売れるといっても材料代程度の金額だがとにかく飲み代にはなるので誤った自信を持つようになったのもこのころである。そこでやっと気がついて記録を取っておこうという気になり、写真に撮って記録に残すようになったわけである。宮崎にいる頃、飲み屋で地元の青年数人と知り合いになり、その中の一人が画家志望だったがとても食えないので今は広告代理店で働きながら絵を描いていると言っていた。その彼が地元の新聞に「地元の若者のホープ」ということで酒屋の看板を描いている写真付きの記事が載ったことがある。ある日「澤井さん、絵は趣味で描くのが一番ですよ。プロにならないほうがいいですよ」と言っていたのが印象に残っている。

別の友人に宮崎の「高鍋町にプロの絵描きがいるから彼の話を聞きに行こう」と誘われてある晩900円の焼酎を2本ぶら下げて二人で訪ねた。

人口二万人くらいの小さな田舎町の商人宿のおやじで、商売は奥さんに任せて気ままに絵を描いている羨ましい身分の男だった。酔うほどに彼の口から愚痴が出るようになり若い頃、中央の展覧会に毎年出品していたが一

度も入選することなく挫折して田舎に帰ってきたようだった。ある年、絶対の自信を持って出品した絵が落選したので堪り兼ねて審査員の先生を訪ねて理由を聞いたそうである。その先生いわく「あなたどこかの先生についていますか。今回の展覧会にはどの先生からも推薦の話はなかったですよ」と言われてさすがにがっかり来たそうである。お茶や花の世界には家元制度が厳然としてあり、ピラミッド型の組織が出来上がっているようだが、絵の世界にもそのような慣習があるとはそのとき初めて知った。彼の絵はやや暗い抽象画で、この田舎町では売れないだろうと一目でわかる絵だった。



筑波山 (40号M)
(空自百里基地へ寄贈)

三沢基地に勤務していた頃、北警団の監理部長としての職務上、管下の職場環境を掌握する必要があり、北海道に6個所、東北に3個所のレーダーサイトを暇を見つけては訪問していた。司令部からのお客ということで、各所で宴会はやってくれるは帰りにはお土産を持たせてくれるはで大変世話になったが単身赴任の薄給の身では大したお返しはできない。ある日ふと思いついて各レーダーサイト長に電話して自分の基地の周辺で絵に描いてほしい所があれば写真に撮って送ってくれと頼ん

だ。中には二枚描いてほしいと言うところもあったので全部で11枚描いて送りせめてものお返しとした。

昭和55年から単身赴任を始め、入間、新田原、三沢、浜松、芦屋と10年間に2年おきくらいで転勤したが、どこに行ってもその地方の風景を絵にするため休日は車で走り回っていたので退屈しなかった。また、MU-2で3,000フィート以下で全国を飛び回っていたので空中からの景色は私しか描けないだろうと自負している。平成3年に定年になり、「損保料率算出機構」に16年半勤務したが、主たる仕事は交通事故現場に出向いて現場の写真を撮り、計測したり近所の聞き込みをしたりして事故の真実を掴むことだったので広島県下は全域走破した。その帰りに茅葺屋根の民家を見つけると写真にとっておき、休日に絵にしている。そのアルバムも46冊になった。

故向井潤吉画伯の「日本の民家」シリーズが好きで最近は専ら茅葺民家ばかり描いている。



日本の民家



人生は二度甘い

正木 成虎（5期・海）

「青天の霹靂」突然5期生会会長から小原台便りに投稿せよと命じてきた。

「何で俺が・・・」と反論したが「文句言うなッ!!」ということで書かされる羽目になった。

「ゴキブリ」と呼ばれ上級生から嫌われ下からは恐れられた我々5期生は、思えば実に多士済々（釣りバカ日誌の浜ちゃんではないが）あまりの熱心さにバカと称される熱血漢の集団だった。そんなしぶとい我々も今や校長先生さえ若く思え、人生をいかに終わろうかと模索中なのに「今人生男盛り」とは何と過酷な命題だろう。

「人生」・・・勉強・仕事・恋愛・結婚・マナー・奮起・挫折・成功・挫折・再奮起・定年退職、会社勤め、・・・あと我々に残された人生は「老境」を経験することが残っている。

皮膚は一枚皮なので内なる筋肉が衰えればしわが増える、若い人が労わってくれるので手足が衰える、目がかすみ、耳が遠くなり、忘れっぽくなり、神経が鈍ってくる。されど諸君、嘆くなかれ、これすべて神様が与えたもうた恵みではなかろうか。ピンピンしている若者が急に死んででは周りが驚き、困惑し、悲しむ。しかし身体が衰え、神経が鈍り、世の中の役に立たなくなってから死ねばあまり迷惑をかけなくて済むだろう。（小声・・・人によっては喜ばれるかも知れない）人生の最終回を迎えるにあたって「老境万歳」と思いたい。

そんな歳になってしまったから詳しい脈絡は覚えていないが、「一度目の男盛り」防大4年生の夏休みの話である。シーマンシップの



習得に燃えていた5大隊の海上要員12名は手分けをして相模湾岸の水路誌を作り、紆余曲折、苦心の末学校から相模湾帆走の許可を取り付けた。

雨の相模湾を夜航海で渡り、伊東の防波堤に延々と毛布を干し、温泉客に訝られながら砂浜で同乗教官の交代式を行ったり、下田の港で保安庁の巡視船に横付けして心地良いベットの寝かせて貰ったことを想い出す。

皮肉にも快眠を提供してくれた巡視船は翌日台風接近で出航してしまい、我々は交渉の結果地元中学の家庭科教室に転がり込んだ。台風が予想外に停滞したため軍資金が底をつき、下田の町でアルバイトを探したが成果はボート屋の荒天準備を手伝ったお駄賃のタバコ代だけだった。各人コロッケ1個と山盛りのキャベツで最後の晚餐を飾り、教官が電報で学校に依頼したお金が届く朝を待った心細さも今は懐かしい思い出になっている。

そして話は変わりますが、自衛隊を卒業し、民間会社で7年働き、更にボランティアに打ち込んで7年、私は自衛隊定年後の人生がこんなに長いとは思いませんでした。

有難いことに健康に恵まれ、余生は親子代々お世話になった「海と社会」に恩返しと称し「海を道場に、青少年の健全な育成をしたい」とヨット仲間の会合で漠然とホラを吹きました。ところが数日後「私のクルーザーを使って下さい」と民間の方から夢のような申し出を受け、たちまちホラが実現することになりました。

私は今、クルージングヨットを使って「心を病んだ青少年の立ち直り」「永年仕事一筋に働いたご老人の慰労」「身体が不自由な方の介助」そして「若者の海洋的精神の修得」「一般の方の海への理解」などを標榜し、東京から船を係留している三浦半島まで日参しています。

自分の子供が不登校になった親の気持ちは如何なるものだろう、悲嘆に暮れるだろう。私には耐えられない・・・と最初は不登校児対策について研究してみました。その結果不登校になる原因は多種多様で特定は出来ませんが総じて言えることは「父親の尊厳」が失われている家庭の子が不登校になる傾向にあるようです。逆に父親が頻繁に家族を野外に連れ出すような家庭の子は不登校になる割合が低いようです。しかし登校している普通の子供も明日不登校になってもおかしくない時代です。子供が「自分」を持っていないのです、自分に対する自信、信念というのでしょうか。



塾でも学校でも座っている子供の前を先生が用意した「知識」が洪水の如く流れているのでしょう。従って知識は驚くほど豊富です、しかし（野外などで）自分が置かれた状況を把握してその場に適した知識を引き出すこと、即ち「知恵」を使う機会が著しく不足しています。物が余っている家庭と違ってヨットでは物が不足しています。水が少なければどうするか、刃物が無かったらどうするか、風が強かったらどうするか・・・。

横須賀市の中学生をヨットに乗せ始めて5

年、いろいろな所へクルージングしました。西伊豆の安良里、妻良、石廊崎の長津呂、などなど。今年教えた中学生は9名で夏休みには房総の館山や伊豆の大島・新島・式根島などをクルージングしました。

5月には幼稚だった中学1年生も半年後の今ではセーリングはもちろん、調理、飯炊き、後片付けなど全て出来るようになりました。状況を見てその場に合わせた行動を取れるように成ったのです。

クルージングのある日のことです、朝大島の元町港を出港しましたが曇っていたのでたちまち全周何も見えなくなりました。昼頃でしたか突然黒雲が湧き上がり、強風が吹き波頭が飛沫となり、船が傾き、土砂降りの豪雨になってしまいました。キャビンで海図を調べていた私は「セールを降ろせー!!」と叫んでデッキに飛び出してみたら何と、何と、嵐の中子供達全員で大きなメインセールを降ろしているではありませんか。誰一人慌てることなく、怪我をすることも無く、なすべき事を整然とやっていました。矢張り海は甘くない、普段から厳しい訓練をしておいて良かったとしみじみ思いました。

子供達が海洋的精神、即ち責任感、忍耐力、創意工夫などを日増しに習得し若木の如く成長していく様は頼もしい限りです。

口の悪い同期生に言わせれば私の道楽に子供達が付き合っていると言うかも知れませんが、無事にクルージングから帰って来た子供達の目は自信に満ち溢れ輝いています。子供達の父親代わりをしている私は今、幸せな二度目の（海の）男盛りを過ごさせて貰っています。



子供たちが横付け中

就職援護の現場から



(財)自衛隊援護協会東京支部長
柴田 雄二 (14期・空)

1 はじめに

平成16年8月30日現役卒業。例年なら7月1日勲奨退職の予定が、変則人事のため、2ヶ月遅れての退官であった。午前中に退官行事を終え、午後は退職金を引き出し、借金払い等。夜は私の無事退官を祝しての家族でささやかな夕食会。8月31日、午前8時30分までに出勤されたい、とのこととて、6時30分に家を出た。割合と多忙であった現役勤務の気持ちを整理する暇もなく、慌しい第二の人生のスタートであった。退官前10年余は単身にせよ、自宅通勤にせよ職住接近の勤務であったが、第2の人生は片道約2時間の通勤とそれなりにギャップがあった。

退職する年の4月、空幕の援護課長が来隊し、「団司令、後輩の為に仕事をお願いします。」の一言に押されて現在の仕事に就き、3年が経過した。退職自衛官の再就職に関し、それなりに感ずることもあり、現役後輩諸官に何らかの参考になればとの思いで投稿させていただくことにしました。大きくは2点、一つは一求職者へ、もう一点は指揮官として着意すべきこと、ということです。

2 一求職者へ

この項は、そろそろ定年後の再就職が気になりだした人を念頭に記述します。

- 再就職を担当するものとして何を考えているか。先ず考えるのは、退職自衛官にとって相応しい仕事は何か、ということです。自衛隊と民間の仕事は基本的に違う、このことに誰も異論はないと思います。しかし、退職自衛官に対し、残念ながら国も民間もそういう観点から仕事は準備してくれていない、という厳然たる事実があります。それでは次に考えることは何か。自衛官が現職の時に培った知識、技能を活用（応用）して出来る仕事は何か、を考えます。自衛隊の仕事から民間の仕事に軟着陸するには、ということです。理屈的には種々分析し、考えられますが、結論的には今までの再就職の実績の中で、多くの自衛官が定着している仕事、ということに収斂されると思います。（上記のことは、防衛産業に再就職する一部の人は除きます。）
- その観点から17年度の実績として、佐官が再就職している企業の業種を多い順にあげますと①金融、保険、不動産業、②サービス業、③公務、団体、④製造業、これで全体の87.4%を占めます。
職務で見ますと①専門的・技術的職務、②管理的職務、③事務的職務、④サービスの職務、⑤保安の職務、⑥販売の職務、これで全体の95.7%です。
- 我々が佐官の人に推薦する仕事の一例として、損保の交通事故賠償主任の仕事があります。理由を簡単に言うと、①優良（一流）企業、②自衛隊で培った職務

経歴を適用、③処遇・福利厚生面において良好、④OBの存在による職場環境への順応性が高い、等々です。また、求人側である損保会社が退職自衛官を採用する理由として、①能力の高さ、人格・マナー（民間企業の原点である顧客サービスにおいて、高い専門性と親身な対応により顧客から高い満足度を得られる素地を持っている）、②迅速・正確な事務処理能力（担当業務を遂行する上で必要な事務手続きを迅速・正確に処理することが出来る）、③適切な折衝力（社内外の関係者に対し、必要な説明折衝等を適切に行うことが出来る）を挙げています

- 別の観点から再就職の現状の一例として、次のようなことがあります。

退職後、多くの人が再就職する企業は中、小の企業です。現役間勤務する自衛隊は大組織、任務遂行、日々の隊務運営の間において指揮統率力、管理能力等、知らない内に素晴らしいものを身に付けています。中、小の企業の一部の経営者（管理者）に見られる欠点として次のようなことが言われています。

- ・日常の活動が重視され、規則・組織・機能が整備されていない
- ・企業等内上下左右の調整連携が不十分である
- ・業務等に関する説明、具体的かつ時間的余裕ある指示等がなされない
- ・権限、義務、責任の3面等価を期待することは難しい
- ・零細企業、個人的企業、同族企業においては独特のものがある

再就職した時、上司、同僚の仕事振り、職場の文化等、各種のギャップ感、これらをどのように克服し、意識を変革し、再就職先で存在感を高めていくか、状況判断能力が問われています。それらをどう乗り切り、気持ちを整理し、前向きに勤務するかが一つのポイントだと思います。

- 退官してみると、自衛隊が素晴らしい組織であったことを再認識させられます。例えば援護ということに限ってみても、退職を控えた隊員には、技能訓練（部内技能訓練、部外技能訓練、車両操縦訓練）、通信教育、業務管理教育、就職補導教育を実施しています。更に能力開発設計集合教育、技術資格集合訓練、就職相談、進路相談等々を実施しています。このようにステップを踏んで各種の教育、指導があるので、それらの教育等に対し、素直に、誠実に取り組み、心構えを確立すれば、退官後の再就職には十分対応できます。自衛隊は至れり尽くせりの教育等を行っています。

アドバイスとして、業務管理教育等受講時、次のような自己確認を是非実施してもらいたいと思います。

- ・自分に何が出来るか
過去の職務経歴を整理しながら、自分に何が出来るか、職業能力の整理と明確化

- ・健康状況、体力の再点検
- ・人脈のチェック
- ・経済状況のチェック
- ・なぜ働くのか

再就職の原点の確認

- ・気持ちの切り替え、意識の転換

心構えが中途半端だと、再就職先において少しの困難があっても挫折しやすくなります。現役勤務間において皆さんはそれぞれに厳しい勤務をしてきています。そのことに自信を持って欲しいと思います。あるデータによると、50台半ば迄健康に生活してきた人の平均寿命は90歳近いといわれています。退職後の30～35年をどのように生き甲斐感を持って生活するか、気楽に、のんびりというには長過ぎると思います。また、年金制度も逐次変更され、これから退官する人の満額受給は65歳です。これからの退官者を取り巻く諸々の環境を考えれば、我々の先輩と同じようにはいかないと思います。これらの現実を踏まえた対処も必要です。

3 指揮官へ

- これを読まれる現役の人、部隊規模は別にして殆どの人が指揮官を務めています。業務管理教育において私が強調しているのは、援護は指揮統率の一部である、ということです。援護に関し、部下、部隊に対し適切な指導が必要です。良い再就職を達成させる為には、任務遂行、練成訓練等の場において隊員をしっかり鍛え、各自の職務を全うさせて卒業させることです。企業等が求める人材は、基本的には自衛隊が自衛官に求めるものと本質的には同じであると考えています。「自衛官の心構え」が自然体として体现できる人、です。
- 再就職を組織として適時、適切に支援することは、自衛隊の精強性、健全性を維持する観点からも大変重要です。退職する個人にとっても、第二の人生を意義あるものにする為の前提条件となります。定年にしろ、任期にしろ自衛官としての任務を全うした部下の幸せを真剣に考える指揮官であれば、援護に関して他人から言われなくても当然のこととしてそのことに関心を持ち、関与すると考えます。
- 本年1月9日、庁から省へと昇格し、これに併せて自衛隊法が改正されて、今まで付随的任務とされていた諸活動が本来任務（3条任務）に加えられました。任務（仕事）が増えれば人・物・金の態勢も増加させざるを得なくなりますが、現状は公務員削減の波の中で自衛官も例外ではない、ということで大幅な人員削減が図られています。陸・海・空自衛隊は任務遂行への影響を局限するとの観点から知恵を絞りながら努力している、と聞いています。

援護の部門も例外ではなく、人員が削減されてきています。それに関連する施策として、任期制隊員の再就職の為に、1都3県に再就職する陸上自衛隊の任期制隊員（海、空自は希望者）については有料職業紹介事業者に委託することになりました。8月から始まったばかりなので軽々に云々は出来ませんが、今まで実施してきた援護協会と自衛隊援護機関との連携による

援護業務の質と量を確保するのは中々難しいと思います。それだけに任期制隊員を直接あずかる中隊長等の責任は大変重いと思います。援護に関し、今まで以上に各級指揮官の関与が必要な情勢となっています。

- 自衛隊の援護部門、また、(財)自衛隊援護協会の働きが悪ければ是非ともご指摘、叱咤激励を戴きたいと考えています。各級指揮官が援護に深い関心を持てば、退職自衛官の援護（職業紹介）の主体である援護協会に自ずから関心が向いてくると思います。そして現役自衛官の皆さんは自分達の将来を託す援護協会の態勢（組織規模、財政基盤等）がこれでよいのかという問題意識も芽生えてくると考えています。

4 終わりに

援護協会が何をしているか、意外とご存知ない人が多いと感じます。端的に言えば「退職予定自衛官に対する無料職業紹介」です。

意を尽くせず、分かり難い断片的な記述となり、申し訳なく思います。再就職準備の為に当協会は「定年制自衛官の再就職必携」を発行しています。体系的に、網羅して記述していますので、この記事が目にとまり、再就職が気になりだした人には大変参考になると思います。是非ご一読をお勧めします。また、「任期制自衛官の再就職必携」は、指揮官職にある人の隊員指導に大いに参考になります。併せてご一読をお勧めします。

いずれにしても我々は退職する人のお役に立てる、第二の人生の幸せを確保する援護、ということを常に念頭において日々業務を実施しています。今後とも同窓生皆様の御支援、御協力を宜しく願います次第です。

紙面の都合で必ずしも詳述できないところもありましたが、疑問な点があれば遠慮なく、援護協会各支部、或いは駐屯地（基地）援護室（援護センター）にお尋ね下さい。我々を大いに利用して下さい。



（編集部注：「定年制自衛官の再就職必携」、「任期制自衛官の再就職必携」は、(財)自衛隊援護協会本部（電話：03-3355-0505）又は札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、福岡各支部に注文すれば一部でも送付することです。）

同窓会事務局員を下番して



元・同窓会総務部長
後 藤 英 二 (13期・陸)

1 はじめに

私は、平成15年7月に退職、平成16年1月に再就職し現在に至っていますが、退官直後に同窓会事務局で総務部長を勤めている先輩から事務局勤務を勧められ、ボランティアで事務局勤務をすることになりました。現役時代にお世話になった先輩の誘いだったこともあり、1～2年間位の軽い気持ちで勤務がスタートしましたが、結果は意に反してプロジェクトチーム勤務を含めると4年の長期勤務となりました。

初年度は総務部見習い、2年目は総務部長補佐、3年目は総務部長、4年目は部長勤務をした同期生3人でプロジェクトチームを組んで同窓会の課題等についての検討と続きましたが、母校防大や自衛官時代に親身な指導や支援を頂いた同窓生の皆さんに少しでもご恩返しが出来たという充実感を持って、事務局勤務を下番することが出来たのは大変幸運だったと思っています。

以下、先輩・同期・後輩の皆さんに支えられながらの同窓会事務局勤務で感じたこと等を述べてみたいと思います。

2 同窓会の大きな変革

当時の同窓会活動は、会則も整備され整齊と運営されてはいましたが、会費の徴収、防大支援のあり方、名簿管理のあり方、各期生会活動の活性化等の当面する課題に加え、慶弔のあり方、議決機関のあり方、地域・地区支部のあり方等将来の同窓会活動の安定的運営を左右しかねない課題も抱えていました。これらの大部分の課題が後輩に先送りされることなく、2～3年の間に具体的な各種施策として実現できたのは、当時の会長・事務局長等役員の強い指導力とボランティア精神に富んだ事務局員（11期生～16期生）のエネルギーな活動にあったと思っています。これらの施策のうち、担当された事務局員が苦勞に苦勞を重ねて実現した幾つかの事業について簡潔に所感を述べたいと思います。

(1) 会費納入率の向上

同窓会の各年度の事業は新規会員が納入する会費を基本に運営されていますが、近年は卒業生の減少や会費納入率の低い期の存在等が年度事業の運営を圧迫するようになって、新規会員の会費納入率の向上と各期の会費未納者からの徴収が大きな問題となっていました。これを克服するため、副会長等の幹部候補生学校等を訪問しての納入依頼や各期生会に依頼しての会費未納者に対する納入呼びかけ等、経理部を中心に同窓会を挙げての地道で粘り強い努力が続けられました。また、近年防大を卒業した新会員の中には、防大に対する同窓会の支援の実態を知らない者が多数いることが判明しましたので、同窓会の防大に対する支援を「目に見える形での支援」に改善し、学生に同窓会をよりアピールできるようにしました。これらの努力の結果、会費納入率は逐次向上し、近年の卒業生の会費納入率は格段に高くなっています。

(2) 各期生会活動の活性化

自衛官OBとなった期の各期生会活動は、ホームカミングデイ（卒業40周年時に防大校長が卒業式に招待）やスポーツ・文化活動等でそれなりに実施されていますが、現役自衛官の各期生会活動は極めて限定されているのが現状です。同窓会本部としては、現役自衛官の各期生会活動活性化のため、「ホームビジットデイ」（卒業20周年を迎える年の開校祭時に母校・防大を訪問して記念事業を実施）を事業化するとともに、同期生間の交流促進を図ってもらえるよう各期生会にホームページの設定を働きかけ資金面から助成を始めました。「ホームビジットデイ」を担当した事業部長以下事務局員の2年越しの粘り強い取り組みが現業で忙しい期生会を動かして事業化を実現するとともに、各期生会ホームページも着実に増加し、同窓会ホームページにリンクされています。

(3) 同窓会活動の安定的な運営基盤の整備

同窓会は昭和36年に設立されて40年以上が経過し、財政面からは会員の高齢化に伴う慶弔費（支出）の大幅な拡大が予測されるとともに、意思決定機関の総会への会員参加者数の減少が大きな問題となっていました。同窓会活動が将来的に安定的に運営されるためには、これらの課題の克服は避けて通れない状況になっていました。このため、平成17年度総会に「慶弔制度」と「同窓会の意思決定要領」（総会から代議員会に変更）等に関する会則の改正が諮問され、総会参加の各期代議員や一般会員から積極的な賛同を頂き、改正案が決議されました。この他、会費等の収入に見合った事業規模への移行を図るため、毎年、全ての事業について必要性・可能性と成果の面から厳しい見直しを行うとともに、各期生会・地域支部活動の資金面から助成（要望による試行）や同窓会創設50周年事業（平成23年）の検討等の将来を見据えた事業も着実に進められており、同窓会活動が将来的にも安定的に運営できる基盤は着実に整備されつつあると思っています。

3 後輩の皆さん、同窓会事務局員としてボランティア活動を！

同窓会事務局は、担当期となった期生会から指名された11名（陸5名、海・空は各3名）のボランティア要員が事務局員として活動していますが、各期とも要員指定に苦勞されているのが現状かと思っています。事務局員としての勤務は、会社等勤務の傍らでのボランティア活動になりますので、時間的にはかなりきつい面もあります。その反面、嘗て小原台で同じ釜の飯を食った先輩・同期・後輩の皆さんとともに、母校・防大や国内外で活躍中の同窓生に貢献できますので、必ずや充実感を持つことが出来ます。

18期以降の後輩の皆さん！退官直後の2～3年間、ボランティア活動の時間が少しでも取れそうな方は、是非、同窓会事務局勤務をお奨めします。

4 終わりに

ボランティア活動の3原則は、自発性、無償性、公共性といわれていますが、これらの中でも自分なりのモチベーションに基づく高い自発性が最も重要だと思っています。私は、当時の事務局員（9期・陸）の「同窓生や防大在校生のため、誰かがやらなければしょうがない。事務局員になってもらった皆さんには大変ご苦勞さんだが、一緒になって頑張ろう！」の激励の言葉と常に率先陣頭の活動姿勢に魅せられてボランティア意識が振起され、どっぴりと事務局活動に漬かってしまうことになりましたが、結果として大きな充実感・達成感を持って同窓会事務局員を下番することが出来ました。

防衛大学校同窓会創設50周年記念事業について

準備委員会

昭和36年1月に創設された防大同窓会は、来る平成23年（2011年）1月に創設50周年を迎えます。同窓会では、標記について平成18年度長期的検討課題としてプレ検討を実施し、その成果を平成19年2月定例代議員会に報告したところです。同時に、平成19年4月、準備委員会を立ち上げて正式に検討を開始することも併せて報告されました。

準備委員会は16期・17期の事務局員から編成されていまして、4月発足後早速勉強会を開始し、第一段階である基本構想の検討から着手致しました。その後の検討経過について報告致します。

因みに、プレ検討成果の報告要旨は以下の通りです。

【財政面の検討】同窓会は、5年前に防大創設50周年記念事業を実施したばかりであり、新たな寄付等再び求めることは理解を得られない。また、ここ数年財政基盤の健全化に取り組んできている現状にかんがみると、この時点で多くの財政切り崩しは厳に避けなければならないということから、予算規模は最大でも1,000万円規模が適当である。

【事業面の検討】本記念事業に充当できる予算が厳しいことを考慮すれば、この度の記念事業は、防大直接支援事業というよりは、同窓会活動の充実発展に資する事業を重視して精選することが適当である。

準備委員会としては、この成果を尊重しつつ、第1段階として、平成20年7月までに基本構想の決定を目指すことで検討を本格開始しました。そこで、先ず基本構想のうち主要な方針事項について検討を重ね、先の定例理事会に諮ったところです。

現在のところ、理事会での合意事項は、以下の通りであります。

- プレ検討の成果を参考にするが、以下の点に留意して検討の深化を図る。
- 半世紀という長い歴史の区切りを考えれば、今の時点で、会員相互の親睦・絆の強化という「内部態勢の充実」1柱に絞るすぎることなく、同窓会設立の目的趣旨にある、あとの2柱、「防大充実発展への寄与」と「社会的活動に寄与」についても検討する。
- 上記3つの柱を検討の基本的枠組みとし、経費面等可能性の検討をある程度進めた上で、どのような規模・内容の事業を計画するかという基本構想を決定する。

平成20年度は、基本構想の決定、構想の具体化及び事業計画の作成に向けて検討を進めて参る予定です。この間、常にフレッシュで柔軟な頭脳発揮が期待できる若い人の発想に期待して、7月には準備委員の交代・再編も考えています。

全国の同窓会員の皆様におかれては、21世紀にふさわしい斬新なアイデアなどご意見がありましたら、どうぞ事務局準備委員長宛にメールなりお手紙をいただければと思います。

全 般 業 務 予 定

暦 年	2007	2008	2009	2010	2011
段 階	構 想 段 階		計 画 段 階	実 行 段 階	
内 容	基本構想の決定		構想の具体化と事業計画の作成	細部計画の作成と事業の執行	
	・方針(目的意義) ・事業規模範囲 ・組織 ・会計 ・業務予定 ・その他		・事業項目・内容 ・事業実施要領 ・予算計画 ・実行組織の編成(部門別) ・業務予定その他	・実行委員会の発足 ・事業計画の具体化 ・部門別に推進	2月祝賀式 ○月A事業 □月B事業 △月C事業
組 織 (委員は、事務局員)	準 備 委 員 会			実 行 委 員 会	
委員会事務	第1期 長:16期 2007.4～2008.7 委員:16・17期		第2期 長:17期 2008.7～2010.2 委員:17・18期	委員長:副会長(担当役員) 副委員長(委員長補佐):18期 委員:19～21期	
	・委員会は、一水会・理事会に報告 ・委員長は、年次代議員会(2月)に報告			・実行委員長に一任 ・委員長は、年次代議員会に終了経過報告	



カッター競技会



遠 泳



棒倒し



卒業式

OB小原台は2008

富永 洋氏 防衛大学校副校長に就任

とみなが ひろし
富永 洋氏が平成19年9月、
防衛大学校副校長（企画・管理
担当）に就任致しました。



（主要経歴）	昭和49年	防衛庁
	平成13年	長官官房 審議官
	平成13年	札幌防衛施設局長
	平成14年	防衛施設庁労務部長
	平成14年	同 業務部長
	平成15年	技術研究本部副本部長
	平成16年	財務省門司税関長
	平成18年	防衛庁長官官房付
	平成18年	防衛施設庁技術審議官
	平成19年	防衛大学校副校長（企画・管理担当）

楨記念室の設立について

防衛大学教授
田中 宏 巳



防衛大学校は昭和27年の開校から55年を迎え、間もなく陸軍士官学校の歴史に並びます。にわかには信じがたいことですが、1年、1年を乗り切ること集中し、ずっと先も見なければずっと後も顧みない戦後の生き方が、そうさせるのでしょうか。戦前のように戦争や大事件が節目になっていればともかく、戦後は幸いにも目安がないほど平穏無事、寿命も長くなり、益々時間の流れに無頓着になってしまいました。

しかし開校以来半世紀が過ぎ、自分の人生や価値観にとって防大の持つ意味を問い直す動きが出てきました。おそらく卒業生にとって防大4年間は極めて重い意味を持つのでしょうか、それは防大で培った精神・思想、所作、体力等が人生の中で大きな支えになったからに違いありません。他方、防大にとっても、組織制度、教育・訓練内容等の整備のほか、伝統の輪郭が形成された草創期こそ、本校の価値と精神の出発点となるがゆえに決定的意味を持っているのではないかと思います。

いうまでもなく草創期に、本校の進むべき方向を明らかにし、器に魂を注入したのは楨初代校長です。開校時に見られる簡潔な手続き、気楽な人間関係、未成熟な組織制度に助けられ、先生と教職員・学生との距離は今よりずっと近く、日常的に先生の警咳に接することが可能で、その過程で得た人格的影響は計り知れなく大きいものがありました。しかし逝去されて間もなく40年、近年、苗字も読めない学生も出てきました。時間の経過につれ足跡が風化するのには致し方ありませんが、先生の精神・思想が風化することは、本校が依って立つ精神的支柱が揺らぎ、伝統の崩壊につながる可能性をはらんでいます。こうした憂慮が、楨記念室設立計画の動機です。五百旗頭校長、馬場副校長のご指導、8期生尾頭誠氏らの熱意によって計画が動き出した模様ですが、なぜか突然具体化の話が私に降ってきました。本業が歴史学で、海自の佐世保史料館・呉史料館、防大資料館の展示に携わった

経験を買われたのでしょうか、今では大変な命題を引き受けてしまったと反省ばかりしています。

07年6月に中堅・若手教官3名、11期の山田道雄氏ら同窓会関係3名、事務局1名をスタッフに勉強会を発足、馬場副校長も加わり、毎週または各週の間隔で開催してきました。毎回3～5時間も喧々囂々の議論を続け、展示案提出のゴールがなければ、何年でも丁々発止が続きそうな盛り上がりを見せています。五百旗頭校長にもご多忙の中出席いただきましたが、最近配布資料をご覧くださいことにしています。

楨先生は講話の前に草稿を何遍も推敲され、そのために沢山の原稿を残しましたが、西洋政治史・政治思想史に裏付けられた原稿は、何回読んでも理解できるものではありません。卒業生から「ものすごくいい話らしいことはわかったが、内容は皆目わからなかった。わかってきたのはつい最近だ。」と聞かされたことがあります、それほど高いレベルのお話であったわけです。途中で西洋哲学の轟教官をスタッフに加え、どうにか理解できるようになりましたが、一時は頭を抱えたこともあります。

大学運営の面で知られた先生ですが、防大で見せた姿



スタッフ勉強会

はまさに哲学者であったというのが勉強会の見解です。哲学不毛の時代に、哲学を考える機会に恵まれた学生は、それだけでも幸せ者であったといえます。戦後の「民主主義化」の国是のもとで先生は、民主主義社会の軍人の使命、使命を実現するための個性の確立や服従の精神について繰り返し説き、また安易な風潮に流されずしっかりとした価値観を持ち、人の上に立つ者ほど重い使命と義務を負わねばならないと戒めています。さらに広い教養に裏付けられたすぐれた見識がなければ、困難な責任は全うできないとも諭していますが、こうした話から先生が尊敬と思慕を受け続ける理由が段々とわかってきました。

展示内容ですが、先生の足跡はできるだけ抑え、学生に話された哲学・思想に焦点を当てて紹介します。現存の資料館の一部を改装して記念室とし、パネル展示15、6枚、ケースに先生の講義ノート、講話原稿、遺品など二十数点を公開します。建替えが近い第1大隊学生舎の前庭の胸像を館内に移設し、写真、揮毫も展示する予定にしています。平成19年度中に完成の見込みでしたが、20年度初頭にずれ込むかもしれません。なお記念室設置を契機に、整頓と処分を同義語としてきたこれまでの慣習を見直し、後世に残すべき資料を整理、保存する体制の構築にもつとめていきたいと考えております。この方面でのご協力も是非ともお願い申し上げます。

第11回防衛大学校オープンキャンパスの開催について

教務部 藤内 司 郎

平成19年7月24日(火)及び27日(金)の2日間、受験生や保護者などに防衛大学校を広く紹介するオープンキャンパスを開催致しました。昨年同様好天に恵まれ、今年で11回目となる今回は2日間で975名の参加を頂きました。

今年の内容は、防衛大学校の教育、訓練及び学生生活の概要を説明した全体説明会、防衛大学校内の施設見学、人社会学、理工学及び防衛学の各模擬授業、在校生との懇談また主に入学試験に関する相談会を実施致しました。

全体説明会の中では在校生によるキャンパスライフスピーチ、防衛大学校内の施設見学では生活の場となる学生舎の見学、各模擬授業では高校生を対象とした理解しやすい題材による授業を、在校生との懇談では約80名の在校生と自由な意見交換が出来る懇談を実施致しました。



全体説明会



校内見学（学生舎）

今回参加して頂いた方のアンケートでは、「受験意欲が高まった。」、「厳しそうだが、有意義な学生生活を過ごせそう。」、「一般大学と同じ教育をしていることに驚いた。」、「設備、環境に恵まれている。」などの感想が寄せられ、防衛大学校への入校意識が向上したのではないかと思います。今後も防衛大学校の広報活動の一環として、広く一般の方々に防衛大学校への理解を深めて頂くとともに、防衛大学校の教育理念、教育環境へのアピールを致します。また防衛大学校へまだ一度もお見えでない方は、ぜひ一度お越しください。防衛大学校教職員一同、心よりお待ちしております。



在校生との懇談



模擬授業（防衛学）

平成19年度運動系校友会活動結果及び部員状況

校友会名	成 績	部員数		校友会名	成 績	部員数	
		男子	女子			男子	女子
応援リーダー部	開校記念祭演舞披露、各部等応援実施、川崎音楽祭参加	13		グライダー部	久住山岳滑翔大会、全日本学生新人競技大会出場	28	3
短艇委員会	全日本カッター競技大会 4位 関東地区カッター競技大会 優勝	56		ソフトテニス部	秋季関東学生リーグ 6部3位	25	
バスケットボール部	男子 秋季関東リーグ戦 5部横浜エリア2位 女子 春季神奈川リーグ戦 3部6位	37	9	ボクシング部	関東大学トーナメント戦 4部2位	51	
柔道部	関東学生優勝大会 男子団体2部ベスト8	57	7	レスリング部	東日本学生リーグ戦 2部優勝 JOCジュニアオリンピックカップ出場	32	1
ラグビー部	関東学生クラブ選手権 3部リーグ中 関東学生リーグ戦 3部2位 入替戦出場決定	130		ボート部	全日本選手権大会、全日本大学選手権大会出場	35	1
サッカー部	神奈川県大学秋季リーグ戦 1部6位	65		フィールドホッケー部	秋季関東学生リーグ戦 男子2部5位 女子3部優勝 2部昇格	29	15
剣道部	関東理工系学生選手権大会 男子団体3位、男子個人2位 関東理工系学生新人選手権大会 男子団体3位、男子個人3位、女子個人2位	75	9	ワンダーフォーゲル部	西湖レークサイド、丹沢山、甲斐駒ヶ岳登山実施	20	
空手道部	全日本大学選手権大会、全国国公立大学選手権大会出場 秋季関東リーグ戦 男子2部優勝 女子1部6位 全自衛隊大会 男子組手団体準優勝	46	8	パラシュート部	日本選手権大会 Jrの部優勝	18	
バレーボール部	秋季関東リーグ戦 男子5部4位 女子8部優勝 7部昇格	26	10	準硬式野球部	秋季神奈川大学リーグ戦 1部4位	54	
卓球部	秋季関東学生リーグ戦 5部4位	20	2	合気道部	防衛省連合会演武大会（優秀支部賞）出場 全日本演武大会、全国学生演武大会出場	58	1
陸上競技部	関東理工系学生大会出場 箱根間往復大学駅伝競走予選会出場 28位	58	3	体操部	東日本学生選手権大会出場	30	5
硬式庭球部	関東理工科リーグ戦 男子6部優勝 5部昇格 女子9部優勝 8部昇格	51	4	弓道部	秋季南関東リーグ戦 男子1部6位 女子2部2位	30	7
硬式野球部	神奈川秋季リーグ戦 2部2位	50		少林寺拳法部	関東学生大会 団体演武最優秀賞 全日本学生大会 団体演武最優秀賞	62	2
射撃部	全日本学生ライフル射撃選手権大会出場	20		フェンシング部	全国国公立フェンシング選手権大会出場	21	
山岳部	広沢寺、鷹取山、乗鞍岳、八ヶ岳、三つ峠、五竜岳、剣岳・飛騨山脈登山実施 文部科学省大学登山リーダー研修会参加	8		ウェイトリフティング部	全日本大学対抗ウェイトリフティング選手権大会出場	15	
水泳（競泳）部	全国国公立大学選手権大会出場	31	3	相撲部	全国国公立大学対抗相撲大会 団体戦優勝、個人戦優勝 全国学生相撲選手権大会 Cリーグ優勝、Bリーグ昇格 東日本学生相撲リーグ戦 3部優勝、2部昇格	19	1
水泳（水球）部	日本学生選手権出場	16		バドミントン部	秋季関東大学リーグ戦 男子5部4位	24	2
ハンドボール部	秋季関東リーグ戦 3部3位	40		居合道部	特になし	20	1
アメリカンフットボール部	関東学生リーグ戦 2部Bブロック3位	71		吹奏楽部	開校記念祭記念式典・観閲式・定期演奏会実施 県南アンサンブル大会 金賞	37	10
ヨット（小型）部	関東学生秋季選手権大会出場	21	1	儀仗隊	開校記念祭記念式典・自衛隊音楽まつり参加 よこすか開国祭、新発田駐屯地祭、川崎音楽祭参加	43	4
ヨット（クルーザー）部	世界学生ヨット選手権（フランス）15位	13	4				
銃剣道部	全日本青年大会 男子団体優勝、男子個人戦準優勝 全日本学生選手権大会 男子団体優勝、男子個人戦優勝	24	7				

顕彰碑献花式

平成19年度顕彰碑献花式は、11月10日（土）13：30～14：00の間、雨天の中、資料館顕彰室で実施された。本式典は、「防衛大学校を卒業した自衛官の殉職者及び防衛大学校在学中の殉職者、または殉職に準じる者の霊を慰める式典」として、昨年度に引き続き、防大開校記念祭行事として行なわれた。本年の顕彰者の総数は、故1等海佐 和泉元 孝（3期）様を加え、89柱でした。

式には、主催者側から五百旗頭学校長をはじめとする主要幹部、同窓会から竹河内会長、1期から55期までの各期の代表者、統・陸・海・空幕の代表者、学生の代表者及び多数の同窓生が参列した。

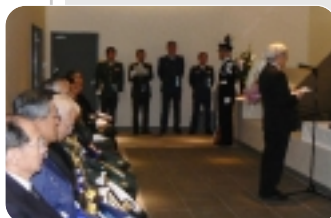
また、小澤防大協力会会長も参列される等、多数の関係者が見守る中、式典は、厳粛に行なわれた。

式は、まず、参列者全員による黙祷、防大儀仗隊による儀仗に引き続き、学校長の慰霊の辞、次いで同窓会会長が同窓生を代表して慰霊の辞を述べ、「同窓生は、2万1,000名に及び、本年、防衛庁は防衛省へ移行し、現役の同窓生は、国内はもとより広く世界各地において活躍しております。」旨を御霊にご報告するとともに同窓生一同、決意を新たにし、志半ばにして職に殉ぜられた御霊のご遺志をしっかりと受け継ぎ、我が国の平和と独立を保つ使命を果たすことを誓った。

総務部機関誌担当記



会長慰霊の辞



学校長慰霊の辞



各期生代表者の献花

防大卒業留学生歓迎夕食会

防大では平成2年度から毎年、開校祭の時期にあわせ、防大卒業後約10年を経過した留学生を招聘して、約10日間程度日本国内の研修や開校祭の見学などの行事を企画・運営している。これは、留学生が母国に帰国してからも相互の交流を継続することにより、わが国と留学生派遣国との友好親善を深めることを目的としている。

今年は、マレーシアからモハammad・パウジ・ビン・デリス陸軍少佐（陸上41期）、タイ王国からサムラン・パラチーワ海軍大尉（海上43期）の2名が11月5日に来日した。ちなみに、サムラン大尉のご夫人は千葉県野田市の出身とのことだった。

歓迎夕食会は、同窓会の主催で11月12日（月）18：00から明治記念館で開催された。主賓の留学生のほか、国内ゲストとして、かつて派遣国の防衛駐在官を歴任した江口幸一氏（陸上15期・マレーシア駐在官歴任）、城戸正志1陸佐（陸上29期・タイ王国駐在官歴任）、防大国際交流係長隈元3陸佐、それに両留学生と所縁の深い同期生7名を招待した。同窓会からは竹河内会長、石川・遠竹・先崎各副会長、渡邊事務局長、佐田事業部長及び小池、井上両事業担当の8名が参加し、総勢20名の夕食会であった。

竹河内会長が歓迎の言葉として本行事の意義などを述べたあと、挨拶に立った両留学生は、「防大で学んだことは、ことごとく今の仕事の役に立っており、自分のこんにちあるのは、防大の先輩や同僚のおかげです」と感謝の言葉を述べた。

石川副会長の音頭で乾杯したあとは、友好親善ムードに包まれて、いたる所で防大での思い出話や今後の抱負に会話がはずみ、瞬く間に過ぎた2時間に名残惜しそうであった。最後は、全員で遺謡歌を合唱したあと両留学生を見送りして、意義深い交流行事を和やかな雰囲気で行事終了した。本行事の国際親善に果たす役割は極めて大きいものと考えられ、今後は招聘者数の増加などの拡充施策が望まれる。

事業部担当記



竹河内会長の挨拶



モハammad陸軍少佐（41期）の挨拶



サムラン海軍大尉（43期）への記念品贈呈



全員で遺謡歌

第11回防大同窓会期別対抗ゴルフ大会・・・・・・・・・・

今年で11回目を迎えた恒例の同窓会期別対抗ゴルフ大会は、19年9月20日、9月27日の2日間にわたり、千葉カントリー川間コースにおいて実施されました。両日とも天候にも恵まれ、選手は各期の榮譽を担い、防大同窓生らしい澁滞とした熱戦が繰り広げられました。

◆17期生初参戦

平成9年、1期生から7期生、各期10名の選手で始まった大会も今年は新たに17期生が加わりました。参加者の増加と、年齢層の広がりに対応するため、昨年からシニアとレギュラーに分けて開催されています。今年も9月20日にシニアグループ（1期生から7期生）が、9月27日にレギュラーグループ（8期生から17期生）が実施されました。団体戦は、シニアグループが上位5名のネットで、また、レギュラーグループが上位7名のグロス及びネットで競われました。

開会式
竹河内同窓会長挨拶



◆13期生4連覇

団体戦の競技結果は、シニアグループではネットで今年シニア入りした7期が優勝を飾りました。レギュラーグループではグロスで13期が4連覇を達成、ネットの部では10期が優勝を飾りました。

◆ホールインワン誕生

東コース7番182Yで7期の中島攻さんが、大会史上初のホールインワンを記録されました。

事業部担当記



シニアネット 優勝
7期生チーム



レギュラーグロス 優勝
13期生チーム



レギュラーネット 優勝
10期生チーム



ホールインワン達成
7期中島 功氏

第10回防衛大学校同窓会テニス大会・・・・・・・・・・

5月12日（土）に、第10回防衛大学校同窓会テニス大会が母校のテニスコートで開催されました。

今回は、第10回の節目の大会であり、長年にわたり本大会に協力して頂いた元防衛大学校硬式テニス部顧問の八尾隆氏と防衛大学校硬式テニス部に竹河内同窓会長から感謝状の贈呈がありました。

当日は、五月晴れの中、夫婦同伴の選手参加を含み168名の参加があり、各期の代表者が熱戦をくり広げ、また同窓生間の親睦を深めることができました。試合結果は、次のとおりです。

1. グランドシニア（第1～5期）

優勝：松本・上妻 準優勝：清水・萩原
第3位：矢本夫妻

2. シニア（第6～11期）

優勝：第7期 準優勝：第10期 第3位：第8期

3. レギュラー（第12～17期）

優勝：第16期 準優勝：第12期 第3位：第13期

事業部担当記



感謝状贈呈
元顧問 八尾 隆氏



感謝状贈呈
防大公式テニス部



グランドシニア優勝
松本・上妻ペア



シニア優勝 第7期



レギュラー優勝 第16期



懇親会風景

第9回同窓会囲碁大会●●●●●●●●●●●●●●●●

第9回同窓会囲碁大会が、平成19年9月1日(土)に市ヶ谷にある日本棋院本院で行われた。

今回は、1期生から初参加の17期生までの122名（昨年120名）が参加した。



竹河内会長開会式挨拶

まずは、竹河内同窓会長の挨拶、そして高比競技委員長が競技要領の説明を行い試合開始。試合要領は、前回大会からA・B 2リーグ制で行われ、今回も2リーグ制で行った。

各リーグは、有段者も多く参加し、持ち時間ぎりぎりの40分を使って熱戦を展開していた。中にはスピードを信条とした早い勝負の棋士も見られた。

試合結果は、Aリーグは、強豪の6期生を倒した前回3位の7期生が優勝、Bリーグは、8期生が優勝した。来年は、10回目の節目にあたるメモリアル大会ということでAリーグへは、Bリーグから8期生・9期生・1期生が加入し、Bリーグへは、Aリーグから3期生が下がることになる。

各リーグごとの成績は次のとおりである。

区分	優勝	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位	11位
A	7期	6期	5期	4期	14期	3期					
B	8期	9期	1期	2期	16期	11期	13期	10期	12期	17期	15期



大会会場全景

個人戦（防衛大学校本因坊戦）が、9月8日（土）に行われ、7期の松井宏氏が第6代目本因坊（第4代目と合わせ2度目）に輝いた。

以下10位までは、次のとおりです。

準優勝：清水（4期） 3位：高比（1期）

4位：末田（14期） 5位：重野（5期）

6位：萩原（7期） 7位：佐藤（8期）

8位：永岡（14期） 9位：佐藤（2期）

10位：矢治（2期）

事業部担当記



3Aリーグ優勝 第7期生



4Bリーグ優勝 第8期生

8期生のホーム・カミング・デー・・・・・・・・・・

平成19年3月18日(日)、本科第51期生の卒業式をお祝いするため、43年前の卒業生である第8期生がホームカミングデー(HCD)として母校に招待されました。

快晴のお天気に恵まれた小原台は、早朝から卒業生の家族とともに五百簾頭防大校長の招待状を携えた第8期生とその家族計370名の元気な姿で溢れました。

今年の卒業式は、卒業証書授与、五百歳頭学校長長式辞、安倍総理訓示、久間防衛大臣訓示、山崎正和氏の来賓代表祝辞等に取り続き任命・宣誓式等例年どおり厳粛な式典がとり行われましたが、シーンとして静まり返った式場に小泉前首相が地元出身代議士として入場した際には一斉に拍手が沸きあがるというハプニングも見られました。

観閲式では懐かしい在校生のパレードやOB達の観閲飛行に招待者全員が感動したことは言うまでもありません。その後横須賀市内で行われた懇親会においては、はるばる沖縄から駆けつけて来て頂いた桑江元8期担当指導官や佐伯同窓会長が来賓祝辞を述べる等大いに盛り上がり、この日の横須賀市内は一日中8期生の元気な声が響いていました。

(第8期生ホーム・カミング・デー関連事業)

- ・2004年10月 準備委員会設立
- ・2005年～ 8期生全員から寄付金募集
- ・2007年2月 校友会に対する寄付金贈呈
- ・2007年2月～ 防大資料館における記念パネル展示
- ・2007年3月 殉職同期生に対する顕彰献花式
- ・2007年4月 記念誌「あゆみ」発行

事業部担当記



第2回ホーム・ビジット・デー (HVD) ●●●●●●●●●●

11月11日(日) 19年防大開校祭の日、卒業20周年の節目を迎えた31期生100名とご家族、あわせて210名が小原台に集い、第2回ホーム・ビジット・デー (HVD) が盛大に開催されました。

HVDは、平成15年防大「同窓会あり方検討」の中で、現役同窓会会員との交流も実施すべきであるとの答申を踏まえたもので、「現役会員の同窓会意識の高揚」「同期生の団結強化」及び「防大在校生との交流」を図ることを目的としています。

その記念すべき第1回HVDは、18年防大開校祭に第30期生88名とご家族、あわせて169名が参加して、大変な盛り上がりの中、成功裡にその幕を閉じました。

第2回目となる今回、昨年同様に行事開催に先だって期の代表4名が五百旗頭学校長と火箱防大幹事を表敬訪問し、温かい激励のお言葉と、防衛省を取巻く環境の変化に適切に対応することの重要性、安全保障専門官育成の必要性等についてお話を頂きました。



学校長表敬

行事は、最初に顕彰碑前に参加者全員が参列して献花式を実施しました。防大、部隊を通じての殉職者および病気等による物故者へのご冥福をお祈りしました。続いて総合体育館^{きんもくせい}の庭園での記念植樹。アンケートにより選ばれた「金木屋」は、生命力の強さが評価されました。



記念植樹 (金木屋)

観閲式見学は、前日までの雨の心配は見事に払拭され、順調に予定通りに進行されました。観閲式終了後本館前に場を移し、全員揃っての記念撮影。その後防衛学館教場に設けられた会場で「懇親会・総会」が開催されました。



同窓会長挨拶

懇親会の終盤には、竹河内同窓会長が激励訪問され、第1回HVDを上回る参加者数にふれて「31期生の団結力の強さ」を称えられました。また、31期生が、防衛省自衛隊の「正に中核中の中核」「組織を担っていく立場」にあり、その皆が今、小原台で一同に会し「原点に戻って新たなスタートをきること」の意義と喜び、嬉しさ、そして「同期の絆の強化」を熱く語られると、HVD懇親会の歓声はピークに達しました。最後に「追憶歌」を全員で合唱し、「万歳三唱」で華々しく幕を閉じました。

実行委員長 内倉浩昭 1空佐は、HVDを成功裡に終えた後、次のようにコメントをよせてくれました。

- 1 HVDは、卒業20周年という節目に、自衛官・社会人としての原点である小原の丘に集い、語り合うことにより、同期生としての絆を深めるとともに、今後の人生のモチベーションを高め合える非常に意義深い企画であると感じました。
- 2 会長はじめ同窓会事務局、小原台支部、並びに学校長はじめ防大関係部署の皆様のご理解、ご支援、ご協力に心より御礼申し上げます。
- 3 参加家族から、主人、お父さんが、『学生時代・青春時代を過ごした『防大』を具体的にイメージでき、良かった。』また、自衛隊を離れた同期生からも、『防大に足を運ぶ契機となり、多くの同期生と再会できる最高の機会』との声が聞かれました。
- 4 植樹した『キンモクセイ』の成長と、秋に放つ芳しい香りが楽しみです。

事業部担当記



集合写真

防大夏季部隊実習支援

同窓会は今回初めて、夏季訓練で部隊実習に行く第3学年の学生に対して実習先で行われる同窓会員と学生との懇親会の一部を支援する事業を実施した。

陸・海・空要員の3学年は、7月に20個班に分かれて北は、北海道旭川から南は、九州沖縄までの日本各地において部隊実習を行った。この学生実習において、部隊実習担任部隊は、それぞれの実情に合わせ、同窓会員、関係各部隊長、協力団体の方々との懇親会を実施した。



これに対して同窓会は費用の一部を支援したが、そのうち旭川の師岡第2師団長から竹河内会長に対して、「和やかで楽しい雰囲気の中、諸先輩や協力団体の方々心新たに、今回を持って取り組む決意に対する丁寧なお礼的な職種を経験をされて本当に充実した感激した。学生は、同窓を通じた出会いが訓れからの進路決定やたものと思う。



事業部担当記

MCI 事業の現状について

MCI (Military Cyber Institute) 事業は、防衛大学校創立50周年記念事業の一環として、「同窓生の軍事に関する識見を結集し、国家・社会に対して軍事的考慮の重要性を広く発信する。」ことを目的として、平成15年度に準備委員会が発足し、そして平成18年度から防衛大学校同窓会の事業部の一つとして本格的に活動を開始しました。

MCI事業については、不案内な会員の皆様もまだまだ多く、これから「小原台だより」や「同窓会ホームページ」などを通じて積極的に広報し、MCI事業の現状や今後の方向性を皆様によくご理解していただけるように努めていこうと考えております。

1 MCI事業の構想

我が国の国家運営ではその方向性決定の際、軍事的視点が抜けていることが多く見られます。これにはいくつかの原因が考えられますが、その一つには、軍事に関する知識や体験が整理統合されていないため、軍事的視点からの論理的考察が難しいということが挙げられます。

また現在の政治・外交・経済分野では、意識的に軍事的視点を排除する傾向さえみられます。

「MCI構想」は、このような我が国の現状を改善するため、防衛大学校同窓生の力を結集して、国家・社会のための活動を展開しようとするものです。

2 MCI事業として提案された事業の概要と現状

(1) 情報システムの構築と運用

平成15年度に情報システムの中核として同窓会ホームページを立ち上げ、同窓会としての情報発信及び、意見交換の場として運用中です。

(2) 軍事情報の発信

- a 軍事情報発信の一環として、平成18年度から同窓生の著作物の紹介を上記ホームページ内で開始しまし

た。19年11月現在、67名235冊の著作が掲載されており
ます。

- b** 今後、著作物に引き続き同窓生の論文や講演録等の掲載も計画中です。また既に個人でホームページを立ち上げ、軍事情報の発信をされている同窓生にはこれを同窓会ホームページにリンクさせ、広く周知させることも計画しております。

(3)防衛能力者の登録…継続検討

防衛講話、戦史研究、語学、その他特殊軍事技能所有者を同窓会に登録し、部外から要請があればその専門分野に基づき、必要な人材を紹介するという構想です。

(4) 貢献志願者の登録…継続検討

災害時のボランティア活動、隊員募集支援、基地行事等支援、趣味等の指導が出来る同窓生を登録し、要請があれば同窓会として紹介するという構想です。

(5) その他（受託事業）…将来検討

上記以外に提案された事業として「軍事情報に関する資料翻訳・分析・解説」「自治体に対する災害時CPX支援」「防衛研究所の資料整理の受託」等があります。これらはいずれも収益事業として位置づけられるものであり、将来同窓会の法人化とも関連して、検討すべきものであると判断しています。

MCI事業について紹介いたしましたが、この事業はその活動をようやく始めたばかりであり、その完成までは長期間を要する事業であります。またMCI事業は同窓生の皆様の御理解・御協力があってこそ実施可能な事業であります。

今後、MCI事業部一同、皆様のいろいろな御意見を伺いながら着実に一步一步事業を進めていく所存です。今後とも同窓生の皆様の変わらぬ御理解・御協力をお願いいたします。

MCI事業部担当記

宇宙との関わり



内閣衛星情報センター所長
小田 邦博 (13期・空)

1. はじめに

航空自衛隊を退官して半年、朝夕の混雑した電車での通勤にも慣れた平成17年3月、何の前触れも無く唐突に防大9期国見内閣衛星情報センター所長の後任としての打診がありました。自衛官として燃え尽きた後、再び情熱を持って重要な国の仕事に力を尽くせるかどうか悩みましたが、結局情報収集衛星との付き合いも2年半が過ぎてしまいました。せっかくの機会を頂きましたので防大同窓会の皆様に、衛星センターの概要について紹介させて頂きます。ただし極めて機微な情報を扱う組織ですので、隔靴搔痒の表現となります事をお許し下さい。

2. 情報収集衛星導入の経緯

平成10年8月31日の北朝鮮によるミサイル「テポドン」の発射に対する措置として同年12月22日、「外交・防衛等の安全保障及び大規模災害等への対応等の危機管理のために必要な情報の収集」を目的として情報収集衛星を導入する事が閣議決定されました。平成13年4月1日、内閣情報調査室に内閣衛星情報センターが設置され、平成15年3月28日、光学衛星1号機及びレーダー衛星1号機の打ち上げに成功、平成16年4月から本格運用を開始し、更に平成18年度光学2号機及びレーダー2号機を打ち上げ、光学衛星及びレーダー衛星のそれぞれの特性を生かした情報収集能力が整備され、当センターの与えられた任務を着実に遂行しています。

3. 人工衛星の概要

これまで数十年間に約9,000個の衛星が打ち上げられ、そのうち約3,000個が現在活躍していると言われていいます。衛星には軌道高度約36,000Kmで地球の自転に合わせて飛行する気象衛星や通信・放送衛星といった静止衛星、約400～1,000Kmの比較的低い高度を秒速約8Kmの速さで地球を周回する地球観測衛星、科学衛星、偵察衛星等があり情報収集衛星はこの部類にあります。高度600Kmを飛行する衛星も地球の半径の10分の1の高さであり、宇宙から見ればほとんど地べたを這いつくばって回っているようなものでしょう。私も仕事柄宇宙に興味を持ち、プラネタリアムに行ったり、天体望遠鏡を携え星を眺めに旅行します。満天の星空の中に人工衛星を見つけた時はやはり感動します。

4. 情報収集衛星について

前述のように情報収集衛星として光学衛星とレーダー衛星の2種類を運用しています。光学衛星は、極めて高

性能のデジタルカメラが数百Kmの高度を周回しつつ地上を撮影する衛星であり、当然目標上空に雲がある場合と夜間は撮像出来ません。それを補完してくれるのがレーダー衛星です。現在、1日1回以上の頻度で世界中の任意の地点を撮像する事ができます。皆さんもインターネットでグーグルアースの衛星画像を御覧になったことがあると思います。2年程前に映画「亡国のイージス」を見ました。クライマックス近くで先任伍長が情報収集衛星経由の手旗信号を防衛庁に送り、F-2によるイージス艦攻撃の悲劇を直前で回避した。しかし実際には画像は静止画であり、また解像度の面からも手旗信号を読み取ることは出来ません。衛星情報センターでは、平成21年度に光学3号機を、平成23年度に光学4号機とレーダー3号機を打ち上げる予定で事業を進めています。将来の情報ニーズに的確に応えられるように衛星の性能向上に努力しています。

5. 衛星情報センターの活動について

当センターは、衛星の管制及び収集データの処理・分析等を実施する中央センター（市ヶ谷）、データ送受信及び中央センターを補完する副センター（茨城県）、2箇所のデータ送受信施設（北海道、鹿児島県）の4施設で構成されています。15省庁の他、関係機関及び企業からの出向者等を含め約300人強の職員が、管制・画像処理・分析等の業務に従事しており国の力を結集した情報機関と言えます。なお防衛省から派遣された職員は約20%を占め主として分析業務の中核として活躍しています。運用については、利用省庁からの撮像要求に基づき撮像計画を作成し、情報収集衛星が得たデータを処理します。分析官が画像を判読・分析し、画像情報報告書を作成して要求省庁等に配布するというのが一連の運用サイクルです。画像情報機関として、衛星の性能と共に分析官の分析能力がわが国の情報力を左右します。衛星の性能は開発予算に、分析能力は分析官の資質と経験の長さに比例します。厳しい財政状況の中での予算獲得と分析官の長期勤務が出来る人事施策の推進がセンターの大きな課題です。

6. 終わりに

情報収集衛星の成果をお知らせする事は出来ませんが、本格的に運用を開始して4年目、国の独自情報機関としてわが国の安全保障及び大規模災害等への対応に大きく貢献していると自負しております。拙い紹介内容でしたが、同窓会の皆様に宇宙、衛星への興味を深めて頂けたら幸いです。



IGSレーダ2号機打ち上げ

新たな戦場 「永田町」に立って



参議院議員
佐藤 正久 (27期・陸)

平成19年10月13日(土)の屋下がり、奈良の古都^{かしはら}橿原^{うねび}で、畝傍山を見ながら、この原稿を書いています。橿原には講演のために参ったのですが、今回の訪問は、議員になって約2ヶ月半、日本の原点であるこの橿原の地で、これまでの自分を振り返り、また将来を考える良い機会となりました。

橿原は神武肇国の地であり、平城京以前の都である藤原宮があったところ^{いにしえ まつりごと}です。古の政に携わった方々も国の安寧と国民の幸せな生活を願い、慈しみの心をもって政治にあたったものだ^{はやり}と地元の方から教えていただきました。また、「不易流行」という言葉がありますが、奈良の人々は、激動する時代の流れの中でも、今日に至るまで頑なに古都の伝統や格式を守っておられます。言い換えれば、流行に流されずに、守るべきものをしっかりと正面から見据え、政治を司る者と民が一緒になって、そして対応してきた結果と言えるのではないのでしょうか。

私は、先の参議院選挙で当選させて頂き、自衛隊から国政の世界に入ったわけですが、国の平和や安定を願い、国民を守る点では自衛隊も政界も同じであり、それが共通でなければ、私自身、自衛隊を辞められなかったと思います。政治は「守る」という点では、その対象は自衛隊に比し広くはなりますが、佐藤の政治活動の原点は、防衛大学校以来、28年間お世話になった自衛隊であり、現役の自衛官とその家族です。自衛隊の活動枠組みは文民の代表たる政治家が決定しますが、これまでの国際貢献の現場体験から、現場を知る誰かが、政治の場にいる必要性があると強く感じていました。今、自衛隊の仲間が、陸に、海に、空に、そして国内・国外に、国益のために、困っている人々のために、歯を食いしばりながら、汗を流しておられます。そしてそれを家族や地域の方が支えている。その隊員や家族の想い、現場の実相を政治の場に誰かが伝え、現場の隊員が結果を出しやすい環境を創っていかねばいけないとの一念で、制服を脱ぎ、選挙戦を戦いました。

選挙戦では、多くの仲間や防衛大学校の先輩、国を想う方々にご支援を頂き、深く、深く感謝しております。ただ、全国駆けめぐるのは、想像以上に体力・気力のい

るものでした。睡眠時間は2～3時間の連続で、移動も夜行列車や夜行バスといったこともありました。選挙カーに乗りながらマイクを握りしめ、声を枯らしながら手を振っても、なかなか反応はない。ある家の窓が開いて、「ヤッタ!」と思ったら、洗濯物を取り込むために窓を開けただけだったこともありました。悲しいことですが、街頭で「自衛隊は税金泥棒だ!」と罵声を浴びせられたこともありました。ただ、長靴を履いて田んぼや畑に入り、おじいちゃん、おばあちゃんと握手をし、笑顔で励まされると全ての疲れが吹っ飛びます。おばあちゃんの皺だらけの笑顔、何よりも美しい笑顔です。しっかりと国を支え、子育てをし、田んぼや畑を守ってきた大人の笑顔でした。

それぞれの先輩が、守るものを持ち、国のため、地域のため、家族のために汗を流しておられます。良き伝統を受け継ぎ、次の世代がより良き世界になれるように、道筋をつけ、結果を出していくのも政治に携わるものの責務です。今、永田町では、教育再生、国際貢献、年金・医療等国の根幹に係わる事項が熱く議論されておりますが、このような国の根幹に係わる事項は、党利党略ではなく、また与党野党の垣根を取り払い、真摯な議論をして責任を持つべきだと思います。私は一年生議員ではありますが、国会議員を目指した原点は決して忘れたくないし、それに基づいて正々堂々な行動していく覚悟です。

橿原神宮には、七五三のお参りに来たご家族、結婚式を挙げられた若いカップルもおられました。改めて、子供や新郎新婦の笑顔を見て、家族の幸せ・絆を守っていくことの大事さ、国の伝統・文化を守っていく大事さを強く、強く意識しました。私は、国政に携わるものとして、古の方々に負けないよう、良き日本の継承・発展に努力しなければいけないと畝傍山を見ながら古都橿原の地で感じた次第です。

私、佐藤^{まさひさ}正久は、「守る、正す、貫く」即ち、「守るべきものは守る、正すべきものは正す、貫くべきものは貫く」、この精神で原点を忘れることなく、新たな戦場「永田町」で汗を流して参ります。



橿原神宮にて

期生会だより

第2期生会ホームページ開設とその活動状況等

第2期生会会長 井川 宏（海）

●平成19年3月に「第2期生会ホームページ」を開設しました。

メインは近況報告・会員投稿のページですが、このページについては個人情報保護及び他者による悪戯書防止のため、第2期生の専用ID&パスワードでアクセスを制御しております。しかし、その他のページは閲覧自由ですので、特に現役自衛官の同窓生諸官や防大の学生諸君の閲覧を歓迎します。第2期生老人達の「余生の過ごし方」や「生き様？」等が御参考になれば幸いです。

例えば、次のようなものがあります。

- ・テニス・ゴルフ・囲碁等の活動状況
- ・毎年度の総会・月例会の実施等

ホームページのURLは、下記のとおりです。

<http://beetwo.boy.jp/>

●ホームページ作成の趣旨と経緯

第2期生全員が古希を過ぎて自宅で過ごす毎日が多くなりました。このような状況の下では、若さを保つためにも豊富な情報の交換、特に会員相互間の「頻繁なコミュニケーション」がこれまで以上に必要となります。その手段として「ホームページ」は便利な手段の一つですので、陸海空担当者を指名して老骨に鞭打ってホームページ開設作業をお願いしました。担当者は、総括・陸 稲坂哲男さん、海 船山真弘さん、空 大庭肇さんです。

会員相互間の「頻繁なコミュニケーション」を図る手段としては、電子メールがあります。特にメーリングリスト（ML）は、電子メールを駆使する人にとって便利なシステムですので、第2期生会は平成13年12月にBeetwoを発足させました。現在は、会員の約50%がこれに参加しております。しかし、電子メールを使わない（MLに不参加の）残りの約50%の会員の中には、パソコンを所持せず操作もしない人が存在しますので、これらの人に対する「頻繁なコミュニケーション」が難題です。この人たちの中には、本人以外のお子さんやお孫さんがパソコンを使っていてそれを見ることはできるという人もいますと考えられますので、お子さんやお孫さんの使っているパソコンで「ホームページ閲覧」のための本人用の環境を作ってもらえるならば、「ホームページ」は「頻繁なコミュニケーション」のための簡便で有効な方法となります。

以上のようなことをも加味して、電子メール（ML：Beetwo）と「第2期生会ホームページ」という複数のコ

ミュニケーションを図る手段を構成しました。

今の若い世代には、パソコンを持たない人はいないと思いますので、約半数の人がメールを使っていないというのはむしろ驚きかも知れませんが、我々の前後の期の人たちにとっては、参考になることがあるのではないかと思います。思い紹介をしました。

同窓生の皆様からの当該ホームページに対する御意見や御感想を賜れば幸いです。

八期生会だより

8期生会企画担当幹事 濱野 靖（陸）

ホームカミングデイ（HCD）関連行事を完遂

平成19年の8期生会最大のイベントは、ホームカミングデイ（HCD）への参加でした。この行事は、防大卒業式に学校長が該当期の卒業生を招待するもので、今回は8期生がこの栄誉を享受いたしました。

8期生会としては、全国から集う同期生が夫人ともどもそのルーツをたどり、卒業生を祝福激励するとともに懇親を深め、終生の思い出になるようなイベントにするため、この機会に併せて有意義な期生会行事を実施することとし、2年前から準備を進めました。

諸行事は、2月中旬の防大校友会活動への助成金の贈呈を皮切りに開始されました。続いて、「心に残る防大教育」のテーマで我々の学生時代の思い出を12枚のパネルにまとめ、防大資料館に展示しました。これらは、HCD参加者には懐かしい学生時代の回想とともに、防大での4年間で自分達の人生の礎となっているとの思いを共有させてくれました。この展示は、HCDの前後約2ヶ月間続けられ、防大の原点を考える一助ともなり、学生や学校職員からも好評を得ました。



観閲式を見学するホームカミングデイ参加者

3月18日のHCD当日には、アメリカから馳せ参じた者も含め約370名の同期生及び夫人が小原台に集いました。卒業式は安倍内閣総理大臣の臨席のもと厳粛に行われ、その後在校生の観閲行進や卒業生による祝賀飛行等により、本科第51期生及び研究科学生の卒業を祝いました。中でも我々の時にはなかった卒業生による「帽投げ」は印象的でした。テレビや写真で見て知ってはいましたが、「学生」と決別し新たな一歩を踏み出すその瞬間は、かつての自分達の姿に重ね合わせ目蓋に強烈に焼き付くシーンでした。横須賀市内のホテルに場所を移し桑江8期生担当指導官ご夫妻をお迎えしての懇親会では、家族ともども旧交を温め、同期生の絆を確かめ合うことができました。

更にHCD終了後、8期生の記念誌「あゆみ4号」を発行しました。これには、各人の近況紹介やHCD当日の写真等とともに、防大卒業時と現在の顔写真が並べて掲載されており、40数年の人生を感慨深く思い起こさせてくれます。

今回、これら一連のHCD関連行事を、有意義かつ成功裏に終わることができたことは、我々の人生における大きな節目ともなりました。ここに改めて、防大側のご配慮、同窓会本部及び小原台支部並びに同期生各位のご支援ご協力に深く感謝を申し上げますとともに、新たな半世紀を歩み始めた母校の更なる発展を心から祈念いたします。



パネル展示会場・・・学生時代を回顧

21期生会卒業30周年記念行事の概要

21期生会事務局長 山本 洋（陸）

防大21期生会は、平成19年4月28日、卒業30周年記念行事を行いました。期生会としての行事は、10年前の卒業20周年記念行事以来となりました。若干名の会員が既に定年退官しておりますが、現役間に行う最後の行事として大いに盛り上がりました。行事は、小原台で行う防大行事と都内で行う総会・祝賀会が行われました。その概要は以下の通りです。

【防大行事】

防大行事には45名の会員及び夫人が参加しました。慰霊碑に献花した後、研修室や新たに整備された校内の各施設を見学しました。新しい学生舎の見学に際しては、凛々しい4学年が説明してくれたそうですが、某同期のご子息だったとのこと。お父上（某同期）のたっの希望により名前を記載できないのは誠に残念ですが・・・。

【総 会】

総会・祝賀会は明治記念館において行われました。祝賀会に先立ち、総会が行われ、会則の改正、役員改選が行われました。主要役員は次の通りです。

- 会 長：荒川龍一郎（陸）
- 事務局 長：山本 洋（陸）
- 副事務局長：竹田重樹（陸）、飯尾俊政（海）、飯田克幸（空）



彌田 清会長の挨拶



荒川龍一郎新会長の挨拶

また、期生会HPの開設が了承されました。IT担当の3君の尽力に感謝しつつ、積極的に活用して会活動の目的達成のために役立てていただきたいと思います。

- IT担当：山中新平（空）、梅田正敏（陸）、笹尾博通（海）

総会の間、祝賀会参加の夫人方は記念館ご勤務の池上先輩（17期）直々のご案内で館内見学を行いました。

【祝賀会】

大隊ごとの写真撮影の後、記念祝賀会となりました。祝賀会には会員179名、夫人54名の合わせて233名が参加しました。16名の物故会員に対する黙祷を捧げた後、30周年記念行事を計画・準備した彌田清会長の挨拶に続き、荒川龍一郎新会長の乾杯で祝賀会の幕開けとなり、昔話に大いに花が咲きました。



懇親会

【番外編】

祝賀会後の2次会は、大隊、専攻、校友会等々思い通りに集い、夜の更けるまでとはいきませんでした。会場となった某飲食店には多数殺到し、その傍若無人ぶりに大喧嘩を買ったとか買わなかったとか・・・？元気一杯、酒もいっぱい、まだまだ若い者には負けんぞ！



逍遙歌

22期生会総会及び卒業30周年記念行事のお知らせ

22期生会会長 宮下 寿広（陸）

第22期生会の皆様には各部隊等においてご活躍のことと思います。

歳月のたつのは早いもので、われわれ第22期生会も、来年、つまり平成20年には卒業30周年の節目を迎えることとなりました。

今年の夏頃のことです。第22期生の有志が市谷で懇親会を行った際、「卒業30周年という節目の年に何か思い出に残るパーティーでも行おう」という話になり、市谷勤務者の中で準備委員会を立ち上げ、最近ようやく、そのための第一歩を踏み出しました。

現在までに決まった事項は次のとおりです。

- 1 日時：平成20年4月27日（日）（時間は夕方以降）
- 2 場所：明治記念館（港区赤坂）

3 内容：総会と懇親会（夫人同伴大歓迎）

4 準備委員会

委員長 宮下寿広（陸幕防衛部：8-6-40500）
 総括 佐藤 正（陸幕法務官：8-6-41020）
 陸担当 山口正彦（情報保全隊：8-6-44209）
 海担当 泉 三省（海幕人教部：8-6-50200）
 空担当 齊藤治和（空幕運情部：8-6-60400）

今後、既に退職をした陸海空の同期生を部外委員として準備委員会に加わってもらい準備委員会の充実を図ります。同時に、実施内容等をさらに具体化し、なるべく早く名簿を完成させ、今年中には同期生全員に総会と懇親会の大綱を事前に連絡をしたいと考えております。年が明けたなら、案内状を発送し、出欠をとりまとめ、4月27日を迎えたいと思っております。

今後数年して、われわれも定年を迎えることとなりますが、今回の30周年の総会と記念行事は、定年後の22期生会の基本的な方向性を決める上でも意義のある総会・記念行事であると考えています。

多数の同期生並びに同夫人方のご参加を期待しています。

（連絡先）

30周年総会・記念行事準備委員会総括担当 佐藤 正
 （※上記の誰にでも問い合わせをしていただいて結構です）

28期生会だより

28期生会会長 田浦 正人（陸）

「同期の生山が、訓練中亡くなった！」それは、平成2年2月20日、富士学校機甲科AOC入校直前の出来事でした。師団の職種転換教育の教官として、戦車の単車訓練指導中に起こった不慮の事故でした。「他の方々は、ご無事だったのですか？」奥様が最初に聞かれた言葉だったそうです。立派です。奥様とは今でも年賀状でご挨拶させていただいており、数年前、お子さんが大学に合格したとの吉報も届きました。

あれから17年、私は今、彼の原隊である第72戦車連隊長を拝命しています。なにやら運命的なものを感じました。着任後、まず最初に演習場内の生山碑を訪ねました。碑は、装軌車道脇にありましたが、きれいに掃除が行き届いており、お供え物とお花が供えてありました。聞くところによると、生山君の所属していた第3戦車中隊の隊員は、その演習場に来る度に、今でもお参りを欠かさないそうです。隊員達に、「連隊長は、生山2尉と同期なんだよ。」と話すと、40歳以上の隊員しか当時のことを知りませんが、「えー、同期なんですかー。」と皆びっくりします。

志半ばにして、この世を後にした同期は、他にも数名います。我々28期生は、3年前に防大卒業20周年記念同

期生会を開催し、今年は、25年勤続により第29号防衛記念章（いわゆる緑のタヌキ）をいただきます。「緑のタヌキをもらったら、今の自衛隊の悪いところは、自分たちの責任として文句を言ってはならず、定年まで黙って一つでも改善していくべき。」と酒の席で言う先輩達をみてきた我々ですが、もうその年になってしまいました。そういえば、昔は、連隊長のことを「おじいちゃんだなー」と感じていたものです。しかしながら、ここでもう一つギアを入れて、志半ばにして、この世を後にした同期のためにも、頑張らねばと考えている今日この頃です。28期生の皆さん、まだまだ頑張りましょう！



記念植樹（高野慎）

者がほとんどで、中にはもうすっかり髪が白くなった者、薄くなった者、太った者、果ては原形を留めていない謎の東洋人もいました。すっかり変わったと言えば、小原台も変わりました。新しい本館、図書館、学生舎、等々。さぞや懐かしいと思っていた小原台は見知らぬ町並みにも見えました。また、女子学生が男子学生と防大を闊歩し、中には付き合っているらしい仲睦まじい姿を見ると、異次元空間のようでした。変わり行く小原台、防大生、……。そんな風景に、まるで浦島太郎のように自分が一気に年を取った気がしました。

暫しボーっと立ち尽くしていると、横にいた同期に促され、棒倒しが始まることに気づきました。棒倒しで大隊の優勝に力の限り競い合い、その結果で勝って肩を叩き合って大喜びし、負けて半泣きになってうなだれる防大生達。そんな光景を見ていたら、異次元の若者たちのように見えていた今の防大生の顔が、よく見ると20年前の自分たちの姿、防大生だったあの頃の同期諸兄の顔とダブって見えてくるではありませんか。なんだ良かった、やっぱり防大は変わってないや。たかが棒倒しで泣き笑いできる防大生の精一杯の青春がまだここには残っていました。

ホームビジットデー。防大卒業以来20年のまだ現役真っ盛りの同期生が、防大開校祭の日に懐かしの小原台に再結集し、思い出の地で懐かしい友と昔話に興じながら家族ともどもの旧交を温め合い、同期の団結を強め、再会を約す一日。同窓会本部の皆様、良い企画、良き機会を頂き、誠に有り難うございました。

30期生ホームビジットデー

30期生会会長 堀切 光彦（陸）

昨年平成18年11月12日（防大開校祭当日）に防大同窓会本部のご後援を頂き「ホームビジットデー（HVD）」として懐かしの小原台にて30期生の期生会を実施致しました。先輩、後輩の皆様にご報告申し上げます。

卒業以来一訣はや20年、小原台に全国から集合した同期生は約80名、家族を含め総勢約200名の大盛況でした。一行は、顕彰碑参拝、記念植樹、記念撮影、パレード見学、そして昼食会で歓談し、棒倒しが始まる頃に解散しました。

久々に会った同期の顔、顔、顔。若き日の面影をそのまま保っている者はごく僅か。年相応（中年）に老けた



支部だより

九州防大同窓会の活動概要

西部地域支部会長 山口 賢介（7期・陸）

新年明けましておめでとうございます。

同窓生の皆様には、お元氣でご活躍のことと存じます。

九州防大同窓会は、退職会員も増加し19年度には1,000名を超えるまでになりました。九州本部も役員を充実し、更に活発な活動を行っています。

今年度の九州防大同窓会の活動について、紹介します。

九州防大同窓会は、今年度も年間6回（2ヶ月に1回）の本部事務局会合（会議の内3回は、各県支部長と現職副会長を交えての会議、各県支部事務局長会議、各期代表者会議を兼ねています。）を実施しています。

2月に九州防大同窓会総会・懇親会（約200名余り参加）を行ないました。また本部及び各県に担当を区分して、夏季定期訓練中の防大生の激励と、陸・海・空自衛隊の記念行事へ参加しました。10月5日には、秋空の下に、長崎・熊本からの会員の参加も参加して、九州防大同窓会ゴルフ大会を行いました。

各県支部は、支部行事として、防大同窓会総会・懇親会等の活動を実施しています。各県支部独自の活動も年々活発となっています。

また、今年度は、九州防大同窓会福岡支部として「日本海海戦戦勝記念行事」に協賛（8年間続けています）の外、平成17年の福岡県西方沖地震で被災した陸軍基地の記念碑の修復活動に協力しました。

九州防大同窓会総会

19年2月の同窓会総会・講演・懇親会は、今年度も博多全日空ホテルにおいて例年同様に、約200名（退職会員150名、現職会員50名）で、盛大に行われました。



同窓会会場正面



先崎前統幕僚長の講演



九州防大同窓会長挨拶



防大学生歌・逍遙歌

ゴルフ大会（第8回）

今年度も10月5日小郡カンッリーゴルフ倶楽部で、67名が参加し、期別対抗方式で優勝を争いました。今年度の優勝は、11期生グループでした。

九州防大同窓会の主な役員を紹介します

◎九州本部事務局

役 職	期別	要員	氏 名
会 長	7 期	陸	山口 賢介
副会長（現職）	21期	陸	安部 隆志
同（同）	20期	海	方志 春亀
同（同）	20期	空	長島 修照
同（退職）	7 期	陸	伊藤 宏美
同（同）	9 期	空	市来 徹夫
事務局長	9 期	陸	竹下 治雄
総務部長	14期	陸	徳永 喜憲
事業部長	13期	陸	西山 洋
会計部長	17期	陸	大丸 哲生
会計監査	11期	陸	中村 哲示
	13期	陸	西村 長治

◎各県支部

福岡県支部長	7 期	陸	伊藤 宏美
事務局長	9 期	陸	竹下 治雄
佐賀県支部長	7 期	陸	真崎 峰夫
副支部長	10期	空	光吉 達幸
事務局長	12期	陸	田中 豊博
長崎県支部長	7 期	陸	中里 紀一
事務局長	10期	海	樋口八州太郎
大分県支部長	7 期	陸	澤村庄次郎

副支部長	8期	陸	船石	雅信
事務局長	9期	陸	柳瀬	特志
熊本県支部長	9期	陸	齊藤	四郎
事務局長	9期	陸	鋤先	武雄
宮崎県支部長	6期	陸	後藤田	壽司
副支部長	6期	空	樋田	征治
事務局長	14期	陸	二宮	成一
鹿児島県支部長	9期	空	市来	徹夫
副支部長	10期	海	平田	辰雄
同	11期	陸	福島	卓
事務局長	12期	陸	村山	文彦

◎各期代表

1期	陸	織田	稔夫	2期	空	中野	純人
3期	陸	吉村	弘喜	4期	陸	大坪	成二
5期	陸	徳永	文男	6期	空	両角	逸郎
8期	陸	宇都宮	昭成	10期	陸	藤野	善剛

文責 九州防大同窓会事務局長 竹下 治雄

四国地域支部の立ち上げ

四国地域支部準備委員 松浦 孝昇（7期・陸）

四国地域支部は、平成19年12月8日、香川県琴平グランドホテルにおいて、発足総会及び懇親会を実施した。

四国地域支部会員数は、当面、退役会員約150名であり、香川、愛媛（7月28日設立）、徳島、高知の4県の各地区支部から構成される。発足にあたっては、香川地区準備委員 佐々木 淳（3期・空）、愛媛地区会長 赤岡順（4期・陸）、徳島地区準備委員 稲井 淳一（3期・陸）、高知地区準備委員 池 裕生（4期・陸）の各氏のご尽力を頂いた。

懇親会には、竹河内同窓会会長及び鈴木同窓会事務局総務部長の出席を得、和気藹々のうち、盛大に行なわれた。

発足にあたり、同窓会本部からの四国地域および各支部に対する立ち上げ祝い金等、多大な支援に感謝する。

山口支部の活動状況

山口地区支部総務担当 神田 和穂（14期・陸）

防大同窓生の皆さん、初めまして。当山口支部は平成19年3月に新しく発足致しました。会員数は69名と少数ではありますが、これからさらに充実・発展させていきたいと会員一同心新たにしているところであります。

1 同窓会設立の経緯

これまで国防の先頭にたって頑張ってきた防大卒業生も、すでに20期生から定年退職者が出る時期となり、山口県内にも100名に近い同窓生が所在するようになりました。

にも拘らず、これまで山口県内には防大卒業生の同窓会組織が無い、同窓生同士が一堂に会して歓談し、親睦を深める交流の場が無く、やむなく九州または広島同窓会へ加入し、寂しい思いをされた方も多かったのではと思っていました。

折から防大同窓会本部も各県単位での同窓会組織設立を奨励していることも背景にあり、有志が集い、県内同窓生の交流の場として「山口県防衛大学校同窓会」の設立となったわけであります。なお現時点では自衛隊を退官した者のみで立ち上げ、現職隊員の参加については今後会員の方々と検討していくことといたしました。



2 設立総会

19. 3. 24（土）新山口駅前「山口グランドホテル」で同窓生56名（内委任状提出者24名）の出席を得て設立総会を実施しました。

まず議長を選出の後、当日の議決事項を審議、その結果会長には#8期の重永照彦氏が選出されました。重永新会長からは「国防という同じ目的をもって小原台に学んだ同志が現役を退いた今日、当時のことを思い出しながら、明るく楽しい会としていきたい。」という趣旨の挨拶があり、参加者全員、今後この同窓会を更に充実発展すべく決意を新たにしました。その後懇親会にうつりましたが、懇親会では参加者全員が年齢を超えて若き学生当時に模り、先輩方々の温かき指導や後輩の苦労話など当時のままのなごやかな情景がくりひろげられました。

最後には、全員が肩を組んで「学生歌」「逍遙歌」を歌い上げ、次回の再会を約して散会いたしました。

3 実施事業

(1)山口駐屯地での「防大3学年夏期定期訓練部隊実習」時における激励

防衛大学校3学年陸上要員15名の山口駐屯地での部隊実習に伴い、7月25日（水）駐屯地会議室で、同窓会としての激励を実施しました。この度は部隊実習の予定について情報入手が遅れたこともあり、大慌てでしたが、学生は前日からの終夜の警衛実習にもかかわらず、眠い顔も見せず、全員元気溌溌、先輩である我々の意を強くしたところであります。

なお同窓会からの参加者は会長以下3名、激励品



には名物の「萩焼」の湯呑を贈呈しました。またこれに先立ち同窓会副会長である岩本氏（#10陸）は23日（月）勤務の合間をぬい、徒歩行進訓練中の学生に冷たい「スイカ」をプレゼント。特に暑い日でもあったためか、学生は大喜びで「岩本氏のことは忘れても、スイカの味は忘れない。」と言ってたとか。

(2) 会員親睦ゴルフ大会

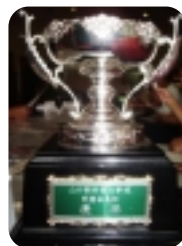
10月8日（土）体育の日、中須カントリークラブにおいて初の山口県防大同窓会親睦ゴルフ大会を開催しました。

台風の接近が伝えられる等天候が心配されましたが、参加者の熱気でほとんど雨・風のない絶好のゴルフ日和となり、3期生の牟田さんを始め有志10名が集い、和気藹々の楽しい一日を過ごしました。

往年の名（迷）ゴルファーの片鱗を伺わせる大技・小技に加え、チョロ・ダブリ・シャンクありで、各人腕前の披露に花が咲き、フェアウェイは笑い声がこだまする愉快な大会となりました。

結果は重永会長が見事優勝され本部から寄贈の優勝カップを手になされました。表彰式後、来年度からは年2回、東部地区・西部地区で開催することを決め、次回の再会を約し解散しました。

今回は初めての開催であり、かつ時間的にも準備の余裕がなかったため参加者が限定されましたが、次年度は総会で具体的に日程等を提案しより多くの参加者をえて実施出来ることを幹事として期待しています。



4 結び

支部発足初年度であり十分な活動も出来ませんでした。今後とも防衛大学校同窓会の充実・発展のため、会員一同、一致団結、努力して参りますので、全国の同窓生の皆様、何卒よろしくご支援ご協力のほど、お願いいたします。

広島地区支部の活動状況

広島地区支部事務局業務幹事 森田 寧（17期・海）

平成19年は、広島地区支部（呼称：広島防衛大学校同窓会）にとって、変化の年でありました。2月、会長以下、次の新役員に交代しました。

会 長（支部長）：松本 暢夫（海11期）

副会長：勝山 拓（海12期）、田中 将夫（海12期）、田所恒之輔（陸13期）

理事長：籠田 純士（陸13期）

3月には、山口地区支部が発足し、山口県在住の会員が山口地区支部の会員へと移行したため、会員数は減少し、195名となりました。

広島地区支部は、広島県在住の同窓生による新たな活動を開始することになりました。

平成19年の活動状況について紹介致します。

例年どおり、2月に定期総会・講演会・懇親会の開催、春・秋季行事としてゴルフコンペ・テニス・ハイキングを実施し、同窓生相互の緊密な交流を推進するとともに、各種団体との交流を図りました。更に、広島県及び岩国市在籍の陸・海各部隊の実施する諸行事にも積極的に参加しました。

定期総会・講演会・懇親会は、2月、広島市内において実施し、約70名の同窓生・家族及び海自呉地方総監半田謙次郎海将（17期）をはじめとする現役同窓生が参加しました。講演会は、陸自第13旅団長佐藤修一陸将補（19期）により「防衛雑感」と題してのユーモアを交えた防衛講話が行われ、参加者は興味深く拝聴しました。引続いての懇親会は、久しぶりの再会に、会場のいたるところで話に花が咲き、恒例の学生歌と逍遙歌の斉唱では、肩を組合い最高の盛り上がりを見せ、会は終了しました。



講演会



懇親会

春・秋季行事は、郷原CCと瀬野川CCでゴルフコンペを、陸自海田市駐屯地でテニスを、春に「三原筆影山」、秋に「絵下山（標高568m）」のハイキングを実施し、延べ約200名の同窓生・家族、自衛隊OB、協力会員等が参加し、盛況裏に終了しました。



ゴルフコンペ



ハイキング

陸・海部隊の実施する記念日行事、観桜会、海自幹部候補生学校入校・卒業式、練習艦隊艦上レセプション等計17回の行事等に、会長（支部長）及び役員等が参加しました。19年は、呉で護衛艦隊集合、砕水艦「しらせ」の呉入港があり、歓迎会等に会員が参加しました。

また、掃海及び潜水艦展示の海自呉史料館（てつのくじら館）が4月に開館しました。館内の案内ボランティアのため「てつのくじら館協力会」が結成され、会長に勝山拓（海12期）氏が就任し、多くの同窓生が活躍しております。

19年もまた国際貢献のため、広島から多数の隊員が派遣され、無事任務を遂行されました。

2月に、第13旅団のUNDOF派遣隊員の壮行会には、広島防衛大学校同窓会の横断幕と幟を持って参加し、隊員を激励しました。

4月には、呉在籍の補給艦「とわだ」がインド洋での洋上補給任務を完了し、帰国しました。呉入港に際しては、「頑張れ 国際貢献」の横断幕と幟を持って松本会長（支部長）（海11期）を先頭に呉基地へ出向き、現役同窓生のみならず派遣隊員の激励、労をねぎらいました。

国の平和と安全はもとより、国内においては災害派遣、海外においては国際貢献という重要な任務遂行において、現役同窓生は、その中核として勤務しております。これら同窓生に対し深甚なる敬意と感謝の気持ちを陰ながら送っております。今後も、ささやかではありますが広島地区支部としてできるかぎりの自衛隊支援を継続していくこととしております。

今年も、広島地区支部は積極的に活動していく予定です。

19年北陸支部の活動状況

北陸支部事務局長 西川 清（15期・陸）

平成19年5月13日（日）JR金沢駅近くの金沢勤労者プラザにおいて、「国民保護・危機管理を考える集い IN 金沢」を開催いたしました。



国民保護・危機管理を考える集い IN 金沢

この催しは、国民保護法に基づき各県・市で国民保護に関する条例等が制定されてきている中で、自衛隊OBとして何か役に立てることはないのか？との濱谷会長（6期・陸）の考えから、講演会・パネル討論会を開催することになりました。

当日は、講演会の講師・パネラーを含め、北陸3県の同窓会会員、隊友会会員、郷友会会員、父兄会会員、防衛協会会員、現役自衛官など、112名の参加となりました。

平成19年9月15日（土）、第6回総会を開催いたしました。今回の総会は、特別な議題もなくスムーズに終了することができました。講演会の講師は、石川地方協力本部の山口本部長にお願いし、国際軍事情勢について拝聴いたしました。

懇親会も例年どおり、学生歌斉唱からはじまり、追遠歌斉唱に終わるパターンですが、現役自衛官5名、OB16名、来賓3等名の参加により、和気藹々と歓談もはずみ有意義な懇親会となりました。

19年は、ゴルフ大会を2回開催いたしました。3月29日 優勝者：小松基地 神田氏、9月29日 優勝者：石川地本 山口氏、開催コースは、いずれもゴルフ倶楽部ゴールドウイン（富山県）でした。

小原台クラブ会務報告

地域支部 小原台クラブ事務局 丸谷 俊博（24期・陸）

1 要 旨

幹部会議を原則、毎月1回実施。新年会、総会、ゴルフコンペを各1回実施。会報を1回発行。オープンセミナーを月1回開催。支援（寄附）実施。

※役 員

会 長 岩崎 俊雄（留任）9期
事務局長 丸谷 俊博（新任）24期
副 会 長 仲摩 徹弥（留任）10期
中島 正雄（新任）13期

幹事長 長谷川礼司（新任）17期
 副幹事長 金子登志夫（留任）26期
 内田 光（留任）26期
 小木曾 淳（新任）31期
 後藤 昌宏（新任）43期
 会計 敦賀 薫（新任）43期
 監査役 古里 昭弘（留任）9期
 若宮 達夫（新任）14期

2 主要イベント

- (1)2006年12月 「小原台クラブ会報 第30号」発行
約1,000部
- (2)2007年1月26日 新年会開催。日本橋サリュコパンにて。
- (3)2007年7月5日 小原台クラブ総会、講演会、懇親会を開催。
新橋第一ホテルアネックスにて。
- (4)2007年11月14日 ゴルフコンペ開催。東京湾カントリークラブにて。
- (5)2007年12月 「小原台クラブ会報 第31号」発行
約1,000部
- (6)2008年2月1日 新年会開催予定。日本橋サリュコパンにて。



ゴルフコンペ

3 概要報告

(1)新年会（2007/01/26）

岩崎会長のご挨拶の後、菅沼名誉会長による新年を寿ぎ出席各位のご健勝を祈念する乾杯で懇親会が始まりました。小原台クラブの特性である1期代から40期代迄が忌憚無く歓談し、交流を深める新年会となりました。

(2)総会（2007/07/05）

総会では、岩崎会長挨拶、若宮事務局長からの会務報告、会計及び監査報告に続き、平成19年度の活動計画と予算、新体制となる役員人事提案があり、いずれも原案通り承認されました。

記念講演会は、小田敬史氏（株）ビューティ花壇29期陸）に「ゼロから上場、そして全国制覇へ向けて」と題して会社設立から2006年6月の東証マザーズへの上場迄の苦労や創意工夫とその後の全国展開への戦略や夢について語って頂きました。

懇親会は、小原台クラブ会員が同伴した民間からの参加者（講演会から）も交え和気藹々と、また様々な方のスピーチや激励を交えながら盛会裏に終了しました。



総会

(3)支援活動

防衛大学校学術教育振興会、及び特定非営利活動法人「日本地雷処理を支援する会（JMAS）」への寄附を継続しています。

(4)小原台クラブオープンセミナー

防大卒業生及び民間の中堅若手の育成を目的とし、また講師にもその趣旨をご理解頂き、無償にて受けて頂きながら月1回の講演会を継続しております。懇親会には講師も参加。

※定例会場：「東京都南部労政会館（ゲートシティ大崎ウエストタワー2F）」。

講演会：19：00～20：15 懇親会：20：30～22：30

【開催履歴（2006年12月～2007年11月）

2007/12/8

講師：中谷 元氏 衆議院議員（24期）

「総裁選及び現在の政治・安全保障動向について」

2007/01/19

講師：伊藤 芳久氏 日本大学薬学部医療薬学研究部門

薬理学ユニット教授

「薬物乱用と薬物汚染」

2007/02/23

講師：和田 則仁氏 慶應義塾大学医学部外科助教

「DRコトと大学病院医学部の現状、最先端外科医療」

2007/03/16

講師：樽松 三郎氏 東京フィルハーモニー交響楽団

常務理事

「オーケストラの話」

2007/04/25

講師：坂本由紀子氏 参議院議員

「国民生活と政治」

2007/05/24

講師：須川 賢洋氏 新潟大学法学部助教

「知的財産権関連」

2007/06/19

講師：秋葉 直人氏 (株)エーザイ 信頼性保証本部

薬制部 課長

「日本の医療・制度・健康」



講演会



懇親会

2007/07/19

講師：坂井 文枝氏 (株)三越 百貨店事業本部
ブランド・CI推進室長

「流通を取り巻く環境変化と三越のブランディング」

2007/08/21 暑気払い

2007/09/19

講師：杉本 重人氏 (防大25期)

(株)ブイ・テクノロジー代表取締役社長

「会社設立と上場秘話」

2007/10/25

講師：佐藤 正久氏 (防大27期) 参議院議員

「新たな「戦場」に立って」

2007/11/30

講師：守本 正宏氏 (防大33期)

(株)UBIC 代表取締役社長

「IT社会における国際訴訟と日本の現状」



オープンセミナー

桜華会の活動状況

桜華会事務局長 吉田ゆかり (40期・空)

新年明けましておめでとうございます。

同窓生の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

桜華会は、一昨年、準備委員会を立ち上げ、防衛大学校同窓会の御支援の下、昨年、正式に発会することが出来ました。今回は、小原台だよりの誌面をおかりいたしまして、活動状況(発会式等)をご紹介します。

平成19年2月10日(土)に、グランドヒル市ヶ谷において、会員20名、子供7名、現役防衛大学校女子学生2名が出席し、「桜華会発会式及び懇親会」を実施いたしました。

発会式においては、「桜華会会則の審議」、「役員人事の審議」及び「発会宣言」を行いました。また、佐伯前会長から、激励の言葉を賜り、大変、身の引き締まる思いでありました。

発会式及び懇親会には、現役(当時)の学生である野呂瀬学生及び八頭司学生も参加してくれました。今後も、会員と現役学生とのつながりも密にし、会の活性化に努めたいと思っています。また、会則も正式に制定したことから、本会の普及に努めていきたいと思っています。

なお、当日は、防衛大学校同窓会の総会及び懇親会も開催されていたことから、桜華会懇親会終了後、同窓会の懇親会にも出席させていただきました。子供連れの会員も多く、同窓会懇親会会場でも、これまでとは違った珍しい風を吹き込んだような感じがしました(同窓会事務局の皆様及び当日ご出席の皆様には、大変ご迷惑をおかけいたしました・・・)。

桜華会は、「会員相互の親睦、相互研鑽」及び「防衛大学校本科女子学生の充実・発展に寄与すること」を目的として発足いたしました。未だ発足したばかりであり、十分な活動が行えていないのが現状ですが、少しずつでも会の活動を進めていきたいと思っております。まずは、HPの立ち上げや15周年に向けた活動を進めていきたいと思っております。

桜華会会員一同、精一杯努力していきたいと思っておりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



◎桜華会の主な役員を紹介いたします。

会長	40期	陸 塚口 千枝 (旧姓：平松)
副会長	40期	海 東 良子
事務局長	40期	空 吉田ゆかり
総務幹事	40期	陸 千葉 奈央 (旧姓：山本)
会計幹事	40期	海 小堀 紀子
HP管理幹事	40期	陸 結城 愛

なお、「桜華会」に関する質問等は、事務局長、各幹事までお問い合わせ下さい。

(航空幕僚監部 人事教育部 人事計画課 吉田3佐)

平成18年度防衛大学校同窓会決算報告

平成19年 3月31日

(単位：円)

項 目		18年度当初予算	18年度実績
一 般 会 計	収 入	会費（49期生等）	21,249,000
		預貯金利息	1,380,000
		固定資産より一時繰り入れ	1,758,170
		雑収入	100,000
	収 入 計		22,729,000
	本 部	機関紙の発行	3,800,000
		代議員会・年次懇親会の開催	1,600,000
		慶弔費（供花、弔電）	500,000
		同窓会名簿の維持	150,000
		スポーツ等交流会の実施	90,000
		防大卒業留学生との交流	150,000
		会費納入促進活動の推進	370,000
		新会則、細則の普及・徹底	100,000
		長期的検討事項の継続研究	230,000
		小 計	6,990,000
	支 部	地域支部等への助成	900,000
		地域支部等の設立準備	160,000
		現職会員地区支部の活性化支援	300,000
		小 計	1,360,000
	支 期 生 会	HCDの実施	300,000
		HVDの実施	300,000
		期生会HPの開設助成	150,000
		期生会との連携強化	160,000
		期生会名簿の作成支援	1,020,000
		小 計	1,930,000
	防 大	開校記念祭支援	2,000,000
		校友会対外活動支援	600,000
		競技会支援（記念品）	540,000
		顕彰碑顕花式支援	150,000
		期生会発足等支援	200,000
		安全保障講座助成	100,000
		小 計	3,590,000
	事業経費小計		13,870,000
	維 持 管 理	事務費	900,000
		通信費	460,000
		交通費	500,000
		会議費	500,000
		小原台事務局運営費	100,000
		事務員雇用費	2,000,000
		本部事務局室賃貸費	2,850,000
		維持管理費小計	7,310,000
	予備費		1,500,000
	支出合計		22,680,000
	積立金に繰り入れ		49,000
	固定資産への戻し予定		1,758,170
	合 計		22,729,000
特 別 会 計	収 入	前年度からの繰越	24,904,086
		預貯金利息	7,000
		収 入 合 計	24,911,086
	支 出	謝金等	2,000,000
		同窓会システムの維持整備	150,000
		通信費及び事務費	150,000
		交通費	200,000
		予備費	1,000,000
		支出合計	3,500,000
	次年度への繰越		21,411,086
	合 計		24,911,086
			27,452,711

会費納入状況

19.11.15 現在

期別	会員数	完者 納数	完率 納%	未完納者数				期別	会員数	完者 納数	完率 納%	未完納者数			
				陸	海	空	計					陸	海	空	計
1	339	320	94	11	6	2	19	28	455	424	93	17	8	6	31
2	359	347	97	8	2	2	12	29	397	363	91	17	7	10	34
3	484	452	93	17	12	3	32	30	415	348	84	48	13	6	67
4	465	437	94	20	7	1	28	31	436	414	95	15	6	1	22
5	529	483	91	26	11	9	46	32	410	360	88	31	13	6	50
6	478	432	90	37	6	3	46	33	453	381	84	45	19	8	72
7	503	460	91	29	7	7	43	34	432	377	87	40	9	6	55
8	467	420	90	34	8	5	47	35	502	485	97	9	5	3	17
9	498	447	90	35	6	10	51	36	358	348	97	6	2	2	10
10	498	454	91	26	8	10	44	37	388	351	90	16	7	14	37
11	495	448	91	28	8	11	47	38	342	268	78	60	10	4	74
12	466	414	89	31	9	12	52	39	351	323	92	8	11	9	28
13	468	419	90	31	9	9	49	40	393	333	85	34	21	5	60
14	492	457	93	20	2	13	35	41	415	373	90	24	15	3	42
15	463	448	97	9	3	3	15	42	417	376	90	19	12	10	41
16	428	404	94	9	4	11	24	43	437	390	89	23	16	8	47
17	498	453	91	20	11	14	45	44	389	226	58	118	41	4	163
18	423	397	94	9	7	10	26	45	351	146	42	140	21	44	205
19	446	413	93	14	17	2	33	46	367	228	62	75	7	57	139
20	383	352	92	17	3	11	31	47	401	351	88	32	11	7	50
21	491	470	96	12	3	6	21	48	439	389	89	24	14	12	50
22	475	413	87	30	9	23	62	49	*294	294	100	0	0	0	0
23	412	390	95	8	8	6	22		325	294	90	26	4	1	31
24	451	418	93	8	18	7	33	50	*323	320	99	0	0	3	3
25	425	402	95	11	4	8	23		369	320	87	27	13	9	49
26	510	471	92	26	7	6	39	51	*371	369	99	2	0	0	2
27	392	381	97	8	1	2	11		411	369	90	2	0	0	2

会員数の項：会費納入対象者（留学生を除く防大卒業者数） 49～51期生の欄：*印の項は、幹候校入校時の在校生に対する数値

会費納入のお願い

防衛大学校同窓会事務局長 渡邊 元旦

昨年同様、本年も51期生の陸・海・空幹部候補生学校在校者のほぼ全員に完納していただきました。衷心よりお礼申し上げます。

また、その他の期においても納入率の向上のために、期生会長及び代議員の皆様にご助力をいただき、成果をあげております。重ねて御礼申し上げます。

同窓会事務局では、「会員相互の親睦、母校の発展及び社会的活動に寄与する」という会の目的を達成するため、同窓会の経済的な基盤を更に固めるべく、18年度から学校等を訪問するなどして会費納入の促進に努めております。

同窓会活動の趣旨を理解して頂き、会費未納の方（事務局で把握しておりますので下記連絡先にご確認下さい。）には、納入宜しくお願い申し上げます。

納入先 ゆうちょ銀行：講座番号 00260-5-□□24826（百万及び十万の桁は無記入）

加入者名 防衛大学校 同窓会

通信欄 期別、要員別及び部隊名（現役の場合）を記入

振込経費 120円

三井住友銀行：飯田橋支店 口座番号：1270680

防衛大学校同窓会 経理部長 三好 光男

なお、銀行振込の場合は、納入者の確認及び完納証等の発送のため、必ず振込者氏名、住所、期別、要員別、振込期日をeメール、Fax、電話等で下記にご連絡下さい。

連絡先 同窓会本部事務局

〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2
Tel / Fax 03-3351-8910 (自即電話 8-6-28895)
eメール honbu@bodaidesk.com

【参 考】

普通会費 防大本科卒業生

卒業時の3尉俸給月額(1号俸)の1/4(千円未満切捨)

防大研究科卒業生(一般大学卒業者)(19年度改正)

卒業年度の3尉俸給月額(1号俸)の1/8(千円未満切捨)

延滞金 1,000円×(完納年度-3尉任官年度又は研究科卒業年度)

(防衛大学校同窓会会費に関する細則より)

会費算出例:46期生で過去に分納がない場合

普通会費 60,000円、完納年度 20年度、3尉任官年度 14年度(15.3)

20年度納入額 60,000円+1,000円×(20-14)=66,000円

(詳細は同窓会事務局までお問い合わせ下さい)

同窓会本部・支部等の役員紹介

平成19年度同窓会本部役員

会 長	竹河内捷次	9(空)
副会長兼理事長	石川 亨	11(海)
副 会 長	遠竹 郁夫	11(空)
同 事	先崎 一	12(陸)
同 事	齊藤 隆	14(海)
同 事	山田 道雄	11(海)
同 事	廣瀬 紀雄	12(空)
同 事	奥山 繁樹	14(陸)
同 事	渡邊 元旦	14(陸)
同 事	藤崎 護	22(陸)
同 事	久納 雄二	22(陸)
同 事	泉 三省	22(海)
同 事	飯田 雅典	21(空)
同 事	中埜 和男	10(陸)
同 事	長谷 勇	11(海)
同 事	土屋 勝政	14(陸)
同 事	山口 金光	16(空)

本部事務局員

事務局		
事務局長	渡邊 元旦	14(陸)
プロジェクト		
プロジェクト担当	小津 光由	14(陸)
プロジェクト担当	小島 健二	14(空)
プロジェクト担当	山根 峯治	14(陸)
プロジェクト担当	寄田 修	14(陸)

総務部		
総務部長	鈴木 健	15(陸)
総務部長補佐	富本 啓一	16(陸)
総務部(総務)	市川 菊代	17(陸)
総務部(機関誌/HP)	池田 茂実	16(空)
同	紀伊 和憲	17(陸)
人事GP		
人事GP長	徳田 正行	15(空)
人事GP(陸)	増田 憲二	16(陸)
人事GP(海)	前川 眞	16(海)
人事GP(空)	原田 千敏	17(空)
経理部		
経理部長	三好 光男	15(空)
経理部長補佐	田代 満次	16(陸)
経理部	持田 清久	17(海)
事業部		
事業部長	佐田 重夫	15(陸)
事業部長補佐	坪井 寛	16(陸)
事業部	小池 重倫	16(陸)
同	赤瀬 公	16(空)
同	中村 吉廣	16(空)
同	伊藤 基行	17(陸)
同	木下 憲司	17(海)
同	原 悦彦	17(空)
同	横山 俊明	17(空)

MCI事業部		
事業部長	瓦谷 育夫	15(陸)
事業部長補佐	山本 博明	16(海)
事業部	村田 和美	17(陸)
同	平山 孝雄	17(海)
事業部(専従)	山本 公志	12(陸)
事務局		
事務局HP技術担当	荒木 紀夫	8(空)
事務局員	峯 ふさ	

同窓会小原台事務局員

事務局長	1空佐	本村 久郎	21
事務局長補佐	1陸佐	村永 次郎	19
顧問	2海佐	山下 啓治	23
渉外部長	2陸佐	大崎 直紀	22
総務部長	2海佐	山本 政雄	24
総務係長	3陸佐	友野 晋吾	35
総務係	2陸尉	矢羽田 峰志	46
広報係長	3陸佐	上本 勝彦	38
広報係	1海尉	岩森 雄飛	45
事業部長	2空佐	格和 都夫	22
企画係長	3空佐	内園 眞作	37
企画係	1陸尉	嶋田 信也	43
事業係長	3空佐	伊藤 寛人	37
事業係	1空尉	増田 智仁	41

地域支部等役員(平成19年度)

北海道地域支部 支部長	工藤 義弘	12 陸	関西地域支部 業務幹事	新見 泰朗	17 陸	長崎地区支部 支部長	中里 紀一	7 陸
東北地域支部 支部長	袖井 孝	9 陸	岡山地区支部 支部長	高橋 正憲	6 空	長崎地区支部 業務幹事	樋口八洲太郎	10 海
東北地域支部 業務幹事	勝 美治	13 陸	岡山地区支部 業務幹事	永岑 富彦	10 陸	熊本地区支部 支部長	壇 燭次郎	7 海
北陸地区支部 支部長	濱谷 隆平	6 陸	広島地区支部 支部長	松本 暢夫	11 海	大分地区支部 支部長	小俣 健二	7 陸
北陸地区支部 事務局長	西川 清	15 陸	広島地区支部 業務幹事	森田 寧	17 海	宮崎地区支部 支部長	後藤田壽司	6 陸
栃木地区支部 支部長	君嶋 信	3 陸	山口地区支部 支部長	重永 照彦	8 空	宮崎地区支部 事務局長	阿万 哲士	4 陸
栃木地区支部 業務幹事	三代 武徳	8 陸	山口地区支部 事務局長	高橋 佳嗣	11 陸	鹿児島地区支部 支部長	市来 徹夫	9 空
群馬地区支部 支部長	日野 繁	2 陸	九州地域支部 支部長	山口 賢介	7 陸	鹿児島地区支部 事務局長	村山 文彦	14 陸
群馬地区支部 業務幹事	鈴 浩樹	23 陸	九州地域支部 業務幹事	藤井 敬文	12 陸	沖縄地域支部 支部長	藤井 建吉	7 陸
東海地区支部 支部長	田中 大三	7 陸	福岡地区支部 支部長	伊藤 宏美	7 陸	桜華会 会長	塚口千枝(平松)	40 陸
東海地区支部 事務局長兼業務幹事	佐藤裕紀夫	12 空	佐賀地区支部 支部長	真崎 峰夫	7 陸	桜華会 事務局長	吉田ゆかり	40 空
関西地域支部 支部長	羽藤 忠和	9 陸	佐賀地区支部 業務幹事	田中 豊博	12 陸	小原台クラブ 支部長	岩崎 俊雄	9 陸

18年12月1日現在

18年12月1日現在

50

名簿管理に関するお知らせ及びお願い

I 利用目的及びプライバシーポリシー

17年4月の個人情報保護法施行に伴い、同窓会名簿管理のあり方について、次のとおり利用目的を明確化するとともにプライバシーポリシーを確立いたしました。名簿管理は同窓会存立の基本的要件であり、会員皆様のより一層のご理解ご協力をお願い致します。

1 利用目的

同窓会本部は、同窓会設立以来、会員の相互親睦、母校への支援、防衛思想の普及等を目的に各種事業を推進するなど、同窓会の充実発展に努力してまいりました。同窓会名簿は、これらの各種事業活動を推進するため不可欠でありかつ同窓会存立の基本であると考えております。

同窓会本部では、同窓会のさらなる充実発展のため、次の目的で皆様の個人情報を利用又は提供させて頂きたいと考えております。

- (1) 同窓会各種事業推進のための連絡
- (2) 機関誌「小原台だより」の刊行（業者に郵送先を提供）
- (3) 会員の慶弔の実施
- (4) 期生会並びに校友会、教務班等グループ活動への協力
- (5) 地域支部等の活動への協力

2 プライバシーポリシー

個人情報の取り扱いにあたっては、情報保護の重要性を深く認識し、個人情報に関する法令、その他の規定を遵守するとともに次のプライバシーポリシーに従い皆様の個人情報の適切な保護に努めてまいります。

- (1) 会員皆様の個人情報は、利用目的の範囲内で収集、利用させていただきます。
- (2) 法令等に規定する場合を除き会員皆様の承諾なしに目的外の利用及び提供はいたしません。
- (3) 会員の皆様が、個人情報の照会、修正、削除等を希望される場合は、同窓会本部事務局人事GP担当者へご連絡いただければ、速やかに対応させていただきます。
- (4) 個人情報へのアクセス、破壊、改ざん及び漏洩などしないように適切に管理します。

II 会員の異動等に伴う名簿修正

従来、名簿管理は、防衛省関係部署のご協力による情報提供と部外委託により実施していましたが、個人情報保護法制定に伴い、防衛省関係部署からの情報入手と部外委託会社の協力が困難となりました。

このため、各期生会のご協力なしに名簿の維持管理は出来ない状況にあります。平成16年から名簿の修正は期生会代議員にお願いして参りましたが、代議員への負担が過大になる等の問題点がありました。17年度からは、代議員の負担軽減と送達の効率化のため要修正項目を厳選し削減するとともにメールの併用等送達手段の多様化を図りました。

今年度からは、各期生会業務幹事の皆様に8月の定期異動等を基準に名簿の修正をお願いしましたが、ご多忙な時期にもかかわらずご理解ご協力ありがとうございました。次年度以降も8月の定期異動等を基準に10月下旬までに年一回の修正をお願いすることになりますので引き続きご理解ご協力をよろしくお願い致します。

また、会員の皆様におかれましても各期生会業務幹事への積極的ご協力をお願いします。

III 同窓会ホームページを活用した異動連絡等

最近のインターネットの普及は目覚ましいものがあり同窓会としてもインターネットの積極的活用を図っております。インターネットを通じた会員の異動通知等は、正確性、迅速性及び安全性はもとより、管理の効率性からもきわめて有効であると考えています。そこで、年1回の定期修正の補助手段として、同窓会ホームページに「異動連絡・ご意見表」の項を設け、住所、勤務地の異動及び本部に対するご意見等を、インターネットを通じて連絡出来るようにしています。各期生会・会員皆様の積極的な活用をお願いいたします。

（参考手順）防大同窓会ホームページ：「お知らせ」→人事Gp「異動連絡」または「異動連絡・ご意見表」

同窓会本部事務局長 渡邊 元旦



月例観閲式

平成19年度防衛大学校同窓会懇親会等の御案内

平成19年度同窓会講演会・懇親会を下記のとおり開催いたします。
ご出席を賜りたくご案内申し上げます。

- 日 時：平成20年2月16日（土）15：30～19：00
- 場 所：グランドヒル市ヶ谷
新宿区市谷本村町4-1（TEL：03-3268-0111）

●懇親会費：5,000円

1. 講演会：15：30～16：30
講師：五百旗頭 真 防衛大学校校長
演題：「激動の世界と日本の進路」
2. 懇親会：17：00～19：00

参加される方は、同封の返信用「はがき」にて平成20年1月25日（金）までにお申し込み下さい。
（いずれにも参加されない方の返信は不要です。）

●代議員会は、平成20年2月16日（土）13：30～15：10の間、行われます。

編集 池田茂実・紀伊和憲
印刷 (株)エイコープリント

防衛大学校同窓会本部連絡先

〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2

●局 線 TEL・FAX 03-3351-8910 ●専用線 TEL・FAX 8-6-28895
E/M: honbu@bodaidsk.com